

茨城県石岡市

# 片野城跡

— NTTドコモ移動無線基地局建設に伴う発掘調査 —

2006

株式会社東京航業研究所



## 序

「片野城跡」は石岡市根小屋に存在する城館跡で、戦国時代には太田資正という武将の居城となりました。城内には資正が守護神として迎えたと言われる七代天神社が鎮座しており、その時、奉納された十二座神楽が現在でも行われています。また、片野城の中心部は市の史跡に指定されており、石岡市内でも重要な埋蔵文化財の包蔵地と言えるでしょう。

また、埋蔵文化財は一度破壊されてしまうと、二度とは回復することはできません。したがって、今を生きている私たちが大切に後世へ伝えていくべきものです。石岡市としましても、その意義をふまえ、今後とも保護・保存に力を注いで行く所存です。

最後となりますが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご指導・ご協力をいただきました関係機関・皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、本書が文化財保護活動の一助になることを祈念いたしましてご挨拶いたします。

平成18年12月

石岡市教育委員会  
教育長 石橋 凱

## 例 言

1. 本書は、茨城県石岡市に所在する片野城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は NTT ドコモ移動無線基地局建設に伴い、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモより委託契約を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、石岡市教育委員会の指導の下に行った。  
所在地 石岡市根小屋字台 401 番地の 1 の一部  
調査面積 156 m<sup>2</sup>  
調査期間 平成 18 年 8 月 28 日～平成 18 年 9 月 21 日  
調査指導 小杉山大輔（石岡市教育委員会）、佐々木藤雄（東京航業研究所）  
調査担当 大橋 生（東京航業研究所）、小久顕治（東京航業研究所）  
調査及び整理参加者 荒川康佑 飯野正子 小野麻人 川村宣央 坂野道雄 高橋 衛  
近清路子 根本 滋 林 邦雄 古川貴弘 家岸未以留 村山彩子  
八島大介 柳 文雄 渡辺信吾
4. 本書の編集は佐々木・大橋・小久が担当し、執筆は小杉山・佐々木・大橋・小久・林・小野が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
5. 人骨鑑定は国立科学博物館、梶ヶ山真理氏にお願いした。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表する次第である（敬称略・順不同）。  
今井千恵 上田孝之 宇留野主税 越田真太郎 斎藤弘道 関口慶久 建石 徹 千葉隆司  
比毛君男 平田博之 広瀬季一郎 村山 修 山本典幸

## 凡 例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。  
全体図 1/120 遺構図 1/60  
土器実測図 1/3 土器拓影図 1/3 銭貨 1/2 金属製品 1/2 石塔部材 1/6
2. 遺構実測図中の座標値は国家標準直角座標IX系に基づく。方位は座標北を、レベルは海拔高を示す。
3. 写真図版は原則として 1/2 とし、石塔部材 1/4、金属製品 2/3 とした。
4. 遺物番号は本文、実測図、写真図版と一致する。
5. 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帳（2001 年度版）』を基準とした。
6. 遺物観察表における法量の（ ）内数値は現存最大値、[ ] 内数値は復原実測値を示す。
7. 遺構内における遺物出土状態を示すにあたり、次の記号を使用した。  
●陶磁・土器 ▲銭貨 △石製品・石器 ■金属製品 ×人骨
8. 縄文土器断面のスクリーントーンは繊維土器を示す。
9. 土坑の平面形および断面形については、以下の分類に従って記述した。

平面形			断面形		
円形	楕円形	楕円(板)形	皿状	鍋蓋状	筒状

# 目 次

序文 例言 凡例 目次

## 第1章 調査の概要

- 1-1 調査に至る経緯
- 1-2 発掘作業の経過
- 1-3 整理作業の経過
- 1-4 調査の方法
- 1-5 基本層序

## 第2章 遺跡の位置と環境

- 2-1 地理的環境
- 2-2 周辺の遺跡歴史的環境
- 2-3 片野城の立地と構造
- 2-4 片野城城主について

## 第3章 縄文時代

- 3-1 遺構
- 3-2 遺物

## 第4章 中世末～近世

- 4-1 遺構
- 4-2 遺物

## 第5章 総括

参考文献

写真図版

報告書抄録



# 第1章 調査に至る経緯と調査経過

## 1-1 調査に至る経緯

まず、平成18年5月2日付でNTTドコモの移動無線基地局の建設に伴い、「埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。照会地はその時点で周知の遺跡の範囲内ではなかったが、市の史跡に指定されている「片野城跡」の周辺地域に当たるため試掘調査が必要である旨を回答した。

平成18年5月30日～6月1日にかけて行われた試掘調査の結果、土坑及び礎土坑、硬化面が確認された。また、遺物も16世紀代のもと思われる土師質土器及び五輪塔の一部分が出土した。このことから、埋蔵文化財包蔵地調査カードを更新し、周知の遺跡の範囲内とした。その後、平成18年6月14日付で株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモが茨城県文化課に「埋蔵文化財発掘の届出」を行った。そして、平成18年7月7日付で茨城県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」通知があったことから、東京航業研究所に委託をし、平成18年8月28日から本調査を行うに至った。(小杉山)

## 1-2 発掘作業の経過

発掘調査は、平成18年8月28日から平成18年9月21日までの4週間にわたって実施した。8月28・29日に草木の除去作業、30日から9月5日まで人力により表土掘削を行い、地表より40cm程で土坑29基、溝1条、ピット2基、道跡1箇所、粘土貼り遺構1箇所を確認した。事前に行われた試掘調査では、五輪塔部材や骨片等も確認されていたものの、片野城跡内の一部であり、虎口状に僅かにカーブした通路に近接していたため、櫓等の建物跡を主とした遺構の検出を予想していたが、本調査の結果、中世末～近世初頭の墓域であることが確認された。土葬墓からは六道銭を伴う人骨が出土した。他に縄文時代早期の落し穴2基、南側の落ち込みからは櫓列と思われる柱穴列を確認した。これらの遺構の調査を適宜実施し、9月21日までに調査を終了した。出土遺物は人骨19体分、五輪塔部材6個を含め、収納箱21箱分に達した。人骨は風化が進んでおり、もろいため、土と共に分割して取り上げ、調査終了後、石岡市教育委員会にて保管することとなった。土器・陶磁器等の出土遺物は少なく、収納箱約3箱程であった。(大橋)

## 1-3 整理等作業の経過

整理作業は平成18年9月25日より10月31日まで行った。9月25日から遺物の洗浄・注記・接合作業を実施し、併行して、今回の調査では、セクションを除く遺構実測を主に写真測量にて行ったため、STP(デジタル図面解析機)による図化作業を行った。

10月2日からは遺構図面の編集、遺物実測・トレース作業、写真撮影、図版作成、原稿執筆作業を行い、23日より31日まで報告書編集作業を行った。(大橋)

#### 1-4 調査の方法

調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査対象地は一边が13 m程の方形を呈し、総面積は156 m<sup>2</sup>を測る。対象地全域が網羅されるよう4 m方眼のグリッドを設定した。

調査にあたっては、試掘の結果から遺構確認面まで40 cm程と浅いため、人力で表土掘削を行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35 mmモノクロフィルム、35 mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。（大橋）

#### 1-5 基本土層

基本土層の確認は、深く掘り込まれた16号土坑の東壁を中心に、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。縄文時代、中世末～近世の遺構はⅢ層上面で確認された。近世の1号溝はⅡ層上面より掘り込まれていた。旧石器時代の遺物は確認されなかった。

I層 表土・耕作土層

II層 7.5YR4/4 褐色土層      ロームブロック、炭化物を少量、赤色粒子、ローム粒を微量含む。やや粘性に欠け、やや締まりに欠ける。

III層 7.5YR4/4 褐色ローム層      粘性をもち、締まる。

IV層 7.5YR4/3 褐色ローム層      粘性をもち、締まる。

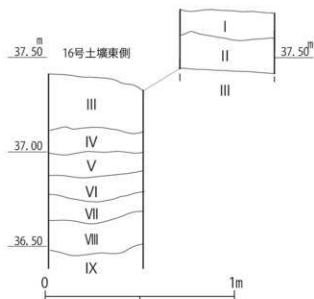
V層 7.5YR4/4 褐色ローム層      粘性をもち、締まる。鹿沼軽石粒を少量含む。

VI層 鹿沼軽石層

VII層 5YR4/4 にぶい赤褐色土層      鹿沼軽石粒を微量含む。粘性をもち、締まる。

VIII層 5YR3/2 暗赤褐色土層      粘性をもち、やや締まる。

IX層 7.5YR4/6 褐色土層      粘性をもち、締まる。（大橋）



第1図 基本土層図 (1:20)



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 2-1 地理的環境

片野城跡は、茨城県のほぼ中央部を占める新治郡の北端、石岡市根小屋字台に所在する。石岡市は南東部には霞ヶ浦が、西方には筑波山系の山々が連ね、北東部に笠間市、東に小美玉市、南にかすみがうら市及び土浦市、南西部につくば市、北西部に桜川市が接している。本遺跡は旧八郷町に位置しているが、平成17年10月1日に旧八郷町と合併し、石岡市となっている。

旧八郷町は、八溝山地に属する筑波山塊に周囲を囲まれており、柿岡盆地と呼ばれている。盆地中央部は恋瀬川が南流し、恋瀬川の流域に発達した肥沃な土地を背景として発展してきた。

恋瀬川やその支流によって開析された小支谷は、複雑に入り込んで、高地、台地、低地と起伏に富んだ地形を形成している。

河川沿いは沖積低地で、一般に水田が開け、丘陵の間を樹枝状に伸びている。盆地の低地以外的大部分は洪積層で、現在は段丘上や縁辺部に、畑や果樹園、松林になっている。集落は山嶺部の緩傾斜地や盆地内の平坦部・微高地に広く分布している。

本遺跡は、恋瀬川の左岸、侵食谷がいくつも入り込んだ台地上位置している。

今回の調査地域は、台地平坦面、標高約37m付近に分布しており、西を流れる恋瀬川との比高差は約27mを測る。

(小久)

### 2-2 周辺の遺跡

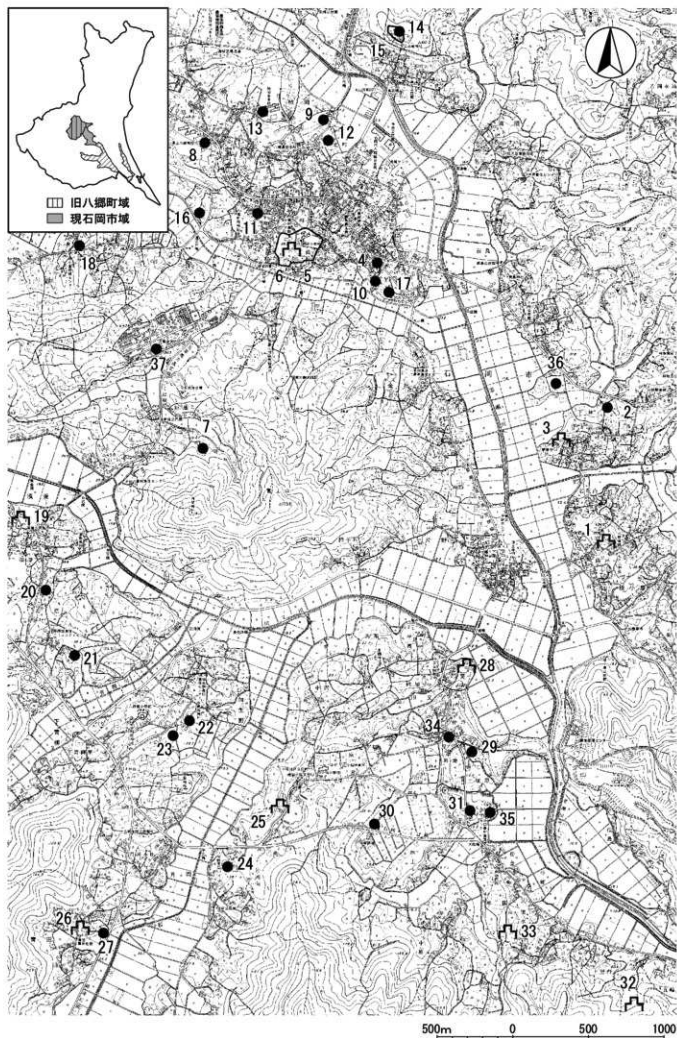
片野城跡が立地する柿岡盆地は、盆地中央を貫流し霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川流域と、盆地の北東部を東方に流れる園部川やそれらの支流などの浸食によって、起伏に富む地形を形成してきた。遺跡の立地もこれら小支谷をはさむ台地上に多く立地する傾向が見られる。以下、当地域の主な遺跡について概観する。

旧石器時代の遺物としては、毛無山遺跡内でミニゴルフ場造成中に尖頭器系統の石器が3点発見された他、八郷町東部恋瀬川支流の南山崎地区で尖頭器が、恋瀬川上流の小見地区で石刃が確認されている。発掘資料としては、半田原遺跡(30)からナイフ形石器を伴う石器集中地点が3箇所確認されているのが唯一のものである。

縄文時代の遺跡は比較的広範囲に分布する。早期・前期の遺跡としては、恋瀬川左岸の下林遺跡(2)や吉生遺跡、恋瀬川支流の南山崎遺跡から当該期の土器が確認されている。また半田原遺跡からは早期沈線文土器の時期の住居が1軒検出された他、早期縹系文・条痕文系土器や前期織維土器が採集されている。

中期の遺跡は八郷町内でも数多く確認されている。洛内遺跡では阿玉台式土器や加曾利E式土器が多量に出土し、八郷高校内遺跡(8)においても中期の土器片が散布している。中期の末葉の土器も、洛内遺跡、恋瀬中戸遺跡、大増十日構造跡、瓦会矢切遺跡、山崎北田向遺跡などで多量に採集されている。

後期の遺跡は中期から引き続き営まれる遺跡で、洛内遺跡、瓦会矢切遺跡、八郷高校内遺跡などが



第2図 片野城跡と周辺の遺跡 (1 : 25000)

あり、後期前葉の称名寺式土器や堀之内式土器が確認されている。

旧八郷町内で晩期の遺跡は確認されていないが、大覚寺西遺跡において晩期の土器が出土したことが記録されている。

旧八郷町域では弥生時代の住居跡は発掘されていないが、弥生時代の遺跡は恋瀬川流域で確認されている。左岸の台地上では佐自遺跡、右岸の台地上では鹿島台遺跡、金指遺跡などがあり、支流域では南山崎遺跡、草穂小学校内遺跡、柿岡盆地西端の吉生遺跡などが挙げられる。

古墳時代になると、旧八郷町内において恋瀬川支流域の台地上に数多くの古墳が形成されるようになる。大型の古墳を伴う大規模な古墳群は、丸山古墳群を中心として、北部に中戸古墳群、瓦会古墳群、南部に加生野古墳群(22)などがある。

丸山古墳群は恋瀬川主流柿岡盆地北端に位置し、茨城県域で出現期の古墳の一つに挙げられている丸山古墳(14)や、透形円筒埴輪や底部穿孔壺形土器を出土した佐自塚古墳、多くの人物埴輪を墳丘に配列していた二子塚古墳などを主墳として、10数基の古墳が点在している古墳群である。一部は埋没しているため、正確な数は不明である。また、丸山古墳群の周辺には前方後墳である長堀2号古墳や、円墳で墳頂に稲荷神社を祀っている和岡塚古墳(12)、遺跡の集中する一面に存在し、工事中に土師器の完形品が10点ほど出土した柿岡中学校内遺跡(13)、各種の埴輪を出土し、中でも鹿の埴輪が県の有形文化財に指定された柿岡西町古墳(11)、柿岡城跡内で多量の土師器が発見された柿岡城跡遺跡(6)、台地上の広範囲に土師器片が確認される中道遺跡(10)、宅地造成で埋没したが3・4基の円墳で構成されていた柿岡下宿古墳群(17)、他にも平成18年の試掘にて住居跡が2軒確認された柿岡池下遺跡(9)などがある。

奈良・平安時代の遺跡は、恋瀬川流域の台地上を中心に発見されている。旧八郷町内で奈良・平安時代の集落跡が調査されているのは、住居跡23軒が確認された半田原遺跡があるのみである。

この時期の遺物が出土する遺跡としては、新地遺跡(7)や瓦塚瓦窯跡などが挙げられる。新地遺跡からは蔵骨器が出土している。未確認の窯業遺跡が相当数存在することもうかがわれる。瓦塚瓦窯は常陸国府に瓦を供給した瓦窯であり、県指定の文化財となっている。

中世・近世の遺跡としては、城館跡がまず挙げられるが、他にも恋瀬川右岸の柿岡下宿火葬墓跡(4)、親鸞の法難の地として知られる板敷山の覚寺や、大永三年間(室町時代1523年)銘の経筒が収められていた嘉良寿理経塚などが知られている。また半田原遺跡からは江戸期の墓塚が発掘されている。

旧八郷町には城館といわれる遺跡は27箇所あり、このうち、八田知家の子八田時知が開城した柿岡城跡(5)や当遺跡である片野城跡を除く25箇所は中世城館で、その多くは江戸時代になると消滅する。

当遺跡の周辺の城館跡として、すぐ北に複数の曲輪を持つ観音寺城跡(3)、小田一族の武將川俣氏の居館であったとも伝わる川又要害(28)、街道の押えと半田氏の居館として機能した半田磐跡(33)、下河辺政義が築いたと伝えられる権現山城跡(32)、小田一族の武將月岡玄蕃の居城といわれている数伎城跡(25)などがある。他にも、小田氏の武將、閏刑部の居館と伝わる青田館跡(26)、小幡氏の城館である堀ノ内館の東側防御であり、江戸時代以降は名主の屋敷として利用された菅間館跡(19)、丸山古墳を内部に取り込み、在地の有力者の居館であったと思われる高友古罟(15)などがある。

(小久)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	片野城跡	縄文・中世・近世	20	阿奈比ヶ平古墳群	古墳
2	下林遺跡	縄文	21	原表古墳群	古墳
3	鎌倉寺城跡	中世	22	加生野古墳群	古墳
4	下宿火葬墓跡	中世	23	加生野遺跡	古墳
5	柿岡城跡	中世・近世	24	月岡古墳群	古墳
6	柿岡城跡遺跡	古代	25	数儀城跡	中世
7	新道遺跡	奈良	26	青田館跡	中世
8	八幡倉内遺跡	縄文	27	岩谷古墳	古墳
9	柿岡遺下遺跡	古墳	28	川又壺窖	中世
10	中道遺跡	古墳・奈良・平安	29	富塚古墳群	古墳
11	柿岡西野古墳	古墳	30	平田新道跡	旧石部・縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
12	和向塚古墳	古墳			
13	柿岡中学校内遺跡	古墳・奈良・平安	31	塚原遺跡	古墳
14	丸山古墳	古墳	32	糠塚山城跡	中世
15	高友古塚(館跡)	中世	33	平田資跡	中世
16	柿岡中内遺跡	奈良・平安	34	川又新地古墳	古墳
17	柿岡下宿古墳群	古墳	35	塚原古墳	古墳
18	小倉古墳群	古墳	36	中道遺跡	古墳・平安
19	倉原館跡	中世	37	藤切遺跡	古墳

第1表 片野城跡と周辺遺跡一覧

## 2-3 片野城の立地と構造

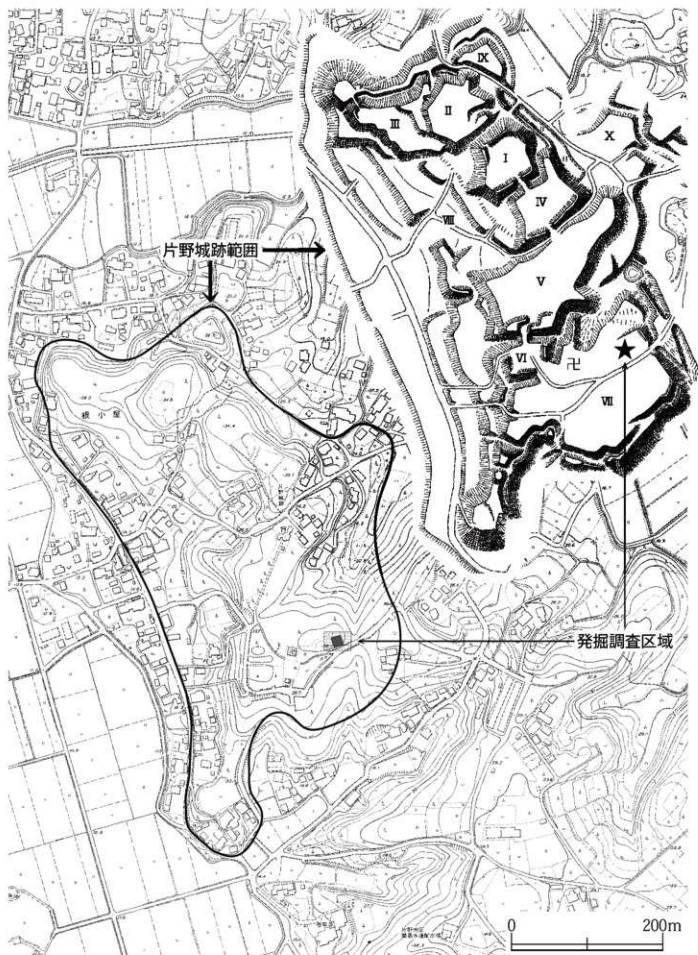
片野城跡は、龍神山の西側に延びた末端が恋瀬川低地に突き出した丘の上に築かれている。低地との比高差は最大30m程であり、全体にわたって多くの侵食谷が入り込んでいる。西側には恋瀬川が流れ、北側には支流の八瀬川(旧逆川)が東の龍神山に入り込み、三方を低地に囲まれた要害である。城は、この丘を利用した東西約500m、南北約850mの大規模なものである。城跡は石岡市指定史跡であるが、全て民有地となり、宅地や畑、山林として利用されているものの、主要な遺構は概ね良好に保存されている。

鎌倉や南北朝の城主の話が伝わるが、現存の遺構は戦国中末期のものであり、多くが永禄～天正期の小田氏との抗争時期に、佐竹氏の影響の下整備されたものであろう。

第3図の主郭は、高さ2～3mの土塁に囲まれた60×80mの曲輪で、ここを中心に台地の地形を利用し、南北に多くの曲輪が連郭式に連なっている。そしてそれぞれの曲輪間には、空堀や土塁が入られ、土橋や木橋で結ばれていた。特に、Vの天神台の柵型虎口と、その外側に設けられた角馬出しは重要な構えである。また、城の北から東は曲輪下に横堀が多用されており、なかでも源兵衛堀や台の池と称される、湧水や谷戸を利用した水濠が今もお見られ、これらは城中の水源としても活用されたのであろう。

八代氏時代の城郭はVやⅥに構えられ、太田三楽がⅠ～Ⅳ等の北部を構築したと伝わるが、縄張りや他城の例からすると、北部が古い片野城で、南の大規模な曲輪群が太田時代に拡張された部分と思われる。

城の周辺の大字は「根小屋」といい、北方から八瀬川を渡った小字「名花内」「北戸張」から、城の西麓を南北に貫く道沿いの現集落に続く「宿」「城下」「織戸」などの地名は、武士や職能集団が居住したかつての城下集落を示すものと思われる。さらに、城の南東に位置する「稲葉新田」地区は、



第3図 片野城跡の位置 (1 : 5000)

この方向からの攻撃を想定した防御集落として設置されたと伝えられる。

全体的に尾根続きの東方の構えが厳重で、城下のあった西部は手薄であるが、集落下の現在の水田面がかつては低湿地であり、こちらからの攻撃はさほど脅威ではなかったのであろう。また、恋瀬川やこの低湿地を利用した、城下への舟入の存在も想定される。(小野)

## 2-4 片野城城主について

文永年間(1264～1274)に小田氏一族の八代(八田)将監が築城したという。また、南南方の片野彦三郎親吉がここにいたとの異説もあるが、いずれにせよ小田氏の属城として東の大隈氏や江戸氏に備えた最前線の城であったものだろう。永禄7年(1564)、築城者の末裔と思われる八代将監の娘婿上曾氏俊が佐竹勢との戦いで討ち死し、この頃、北郡(八郷町)周辺は小田氏から佐竹氏へ割譲されたものと思われる。そして同8～9年ごろ、佐竹義重に客将として招かれた太田資正が、片野城を与えられ入城した。小田城まで3里の片野城は、一転して小田氏攻撃の最前線基地となった。

義重は、資正に片野城、その二男梶原政景に柿岡城を与え、小田氏に対する備えとした。しかし、余所者の資正に邑人は従わず、義重は片野で邑人に養われていた上曾氏の寡婦を彼の後妻とし、資正の娘が佐竹義重の側室となり、政景には真壁久幹(鬼道無)の娘を嫁がせるといった重婚関係を作り、この地域の安定化をはかった。資正とこの後妻との間には、3男資武と4男景資が生まれた。

資正と政景は、佐竹氏の期待に応じて小田氏攻略に全力を尽くし、同12年末の手温坂の合戦では、真壁氏らとの連合軍で小田氏治を破り、本拠の小田城をも陥落させた。佐竹義重はこれを喜び、翌年資正を小田城主としたため、片野には政景が入る。数年後、政景が小田城主となり、資正は片野城に戻った。これ以後、小田氏は、度々小田城奪回作戦を起こすも、その都度資正親子に撃退され、以後急速に衰退する。

天正19年(1591)9月、資正が70才で没すると、3男の資武が相続したと思われるが、間もなく徳川家康の2男結城秀康の家臣となっており、この地を去った。

このため、弟の景資が片野城主となるが、文禄4年(1595)の佐竹領内の配置替えにより、下野武芝城(那珂川町馬頭)に移され、30年に及ぶ太田氏と片野城との関係は終わりを告げた。代わって佐竹一門の石塚義辰が、石塚城(城里町常北)から9ヶ村3776石を預かり入城。この時、故地石塚村から、菩提寺の霊石山泰寧寺(曹洞宗。永正6年(1509)天台舜政開山)、祈禱寺の佐久山浄瑠璃光寺(真言宗。応安元年(1368)恵一上人開山)、大音山浄土寺(浄土宗。天正10年(1582)宝誉玉泉開山)、七代天神社(文禄4年(1595)石塚義國が久慈郡佐竹郷天神林から城の守護神として勧請)など、所縁の寺社を多く移した。これらの寺社は、今もお城址周辺に存在し、かつ次の城主滝川氏も泰寧寺を菩提寺とし、七代天神社の社殿も造営するなど、そのまま引き継いでいる。また、慶長7年(1602)の佐竹氏出羽滅封に従い、石塚氏も当地を去るが、随行できずに残留したと伝える家が根小屋地区に多い事など、石塚時代が以後の時代に与えた影響は大きいと思われる。

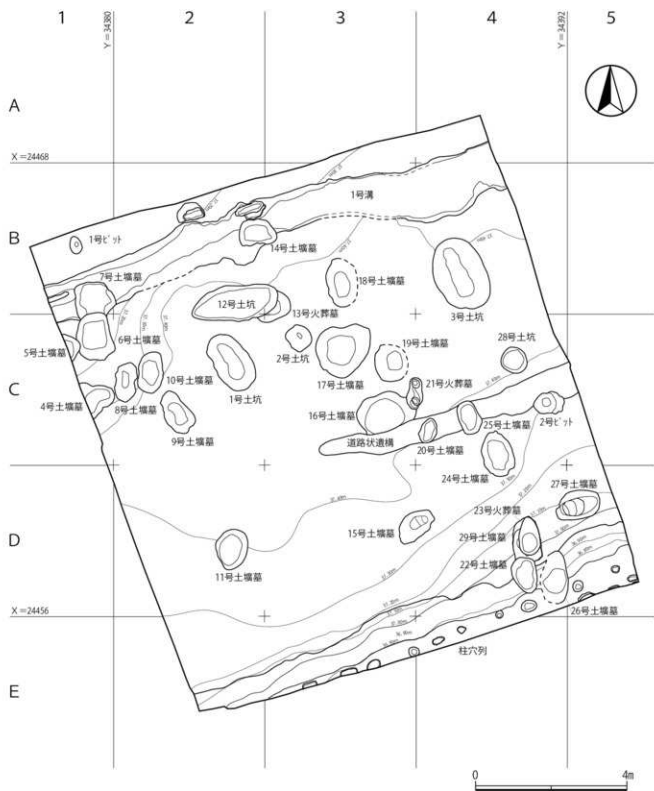
慶長8年(1603)、旧豊臣系大名で將軍秀忠のお咄衆となっていた羽柴(滝川)雄利が、新治郡内で21ヶ村2万石を拝領し、新規大名として片野に入った。これより、片野は「城」ではなく「陣屋」という扱いになった。同15年、雄利没後は子の正利が2代藩主となる。寛永2年(1625)、正利は男子無く、また多病により勤仕に絶えずとの理由で、所領のうち1万8千石を幕府に返上し、根小屋、

片野両村と下林村の一部を知行する2千石の旗本となった。片野陣屋は引き続き存続するが、元禄10年(1695)に「元禄の地方直し」により、滝川氏4代利錦の所領が近江に移されたため廢された。

(小野)

城主名	生没年	略歴
太田直正	1522～1591	源五郎、河原八幡、美濃守、隠居後三楽寺遊覧。太田道直自官の曾孫。武蔵片岡城を本拠とし、入間、比企、埼玉、足立郡に勢力を伸ばした豪族で、上杉氏に仕えて小田原北条氏と敵対する。永禄7年、第二次四谷合戦で北条氏に敗れ、片岡城にいた長男氏直が北条綱成に降参し、居城を移め出されてしまう。その後、成田氏や宇都宮氏を頼り、さらに佐竹義重に招かれたのであった。証正は「片野の三楽」として知られ、弓矢・刀川に長じ、佐竹氏の御降参一や北条氏との抗争に活躍する一方、上杉謙信に重用され、織田信長や豊臣秀吉とも遊を通じ、会津戸氏氏への佐竹義重2男義久入城をまとめる等、外空にも腕を振るった。片野の集落に源氏ゆかりの八幡を祀り、「旗振ばやし」を奉納したり、新降参として上野の寶野寺を再興した等の豪傑もあられる。天正18年(1590)、豊臣秀吉軍が小田原城を圍むと、佐竹義重と共に秀吉も秀吉も伴謀。秀吉の意を阻めたこと、名將と呼ばれたともいいう。同年、源康北条氏の滅亡を見届けた。しかし、故郷の片岡城は、代わって開城に入った徳川家康の領地となり、証正は歸郷することが叫ばれた。翌19年9月8日、70才で片野城に没した。証正隠居御遺徳大居士。
親原政親	1548～1626	証正2男、源太、美濃守、母は高田山越太右衛門守道曾女。高河上吉良氏の命により跡継ぎの命継を継ぐ、上杉謙信の謙信御門の御成で親原高田直正に仕込み侍を勤めた。弓加の術、和歌や平舞、長舞等楽にも通じた。このため証正はこの2男を愛し、長男氏直の御成に違わなかったという。証正が片岡城を治めた期間、城内に文藝をたがが、後に世に出され、文才溢した。この頃、資正よりその記念堂建立を懇請され、上杉謙信に引きよせ無難とされる等、寄事上の御顧問とされている。手廻り合戦の功により父直正が小田原主となったが、片野に帰る。帰朝には親原氏が入った。のち父と交代して小田原主となり、6ヶ村2703石を領する。佐竹の武將として活躍する一方、疑いに北条氏に感じ、佐竹の御成を受けたが、父の威し成しで事なきを得たという。文禄の役では朝鮮に渡っている。慶長元年(1596)、養父高田山越に移された。同7年、佐竹氏の御成御討に参り、しかし、主君義直と対立し、間もなく出奔して弟直政の幕府に参軍に仕立、3千石を知行する。大坂の陣には弟と武者参りとして従軍する。元禄9年(1692)10月19日、76才で没。東光院御遺徳大居士。
太田直武	1570～1643	証正3男、源三郎、源五郎、安房守、証正晩年の嫡子として片野城を治り、兄政親と共に小田原氏や中川惟氏、水戸川氏らの合戦に奔走し、佐竹氏の御降参一直戦した。天正16年(1588)ごろ太田の家督相続。同18年、小田原に参陣し佐竹一門の次に秀吉に伴謀した。父三楽寺の役後には片野城主を譲りだと思われるが、間もなく家康2男の居城秀康に仕えて重臣となっており、慶長6年(1601)の幕府移住に従っている。幕府側では2000石の57900石を知行し、大坂の陣では軍奉行として活躍している。直武の戦した「太田直武武」は戦場明細表に知らぬ名貴な史料である。寛永20年(1643)11月11日、74才で没。瑞雲院御遺徳大居士。
太田直政	1574～?	証正4男、源介、五郎左衛門、見貫武の跡をついで片野城主となったものか。文禄4年(1595)に、下野岡武城に居置となり、30年に及ぶ太田氏と片岡城の領地を譲られた。武蔵では1808石を領した。慶長7年(1602)、関ヶ原の戦いで佐竹義直の所領移住に賛同し、移住する。2男は高田したが、長男の子孫は西出、寺門を執り秋田に仕えた。
石塚謙三	1575～1616	源一朗、入道。佐竹氏一門で佐竹義直の従兄弟にあたる。文禄4年(1595)、太田直政と代わって石塚から入城、9ヶ村3776石を領する。この時、石塚村から菩提寺の菩提寺や新降参の浄徳院光寺を移転させる。慶長7年(1602)、関ヶ原の戦いで、佐竹義直が豊後を取り上げられ別荘村田に移封となる。それに従い片野城を去った。秋田には佐竹義直の御武將として参見し戻したという。大坂の陣には前鋒將士として出陣した。秋田での知行は1500石。元和2年(1616)3月12日、42才で没。法号瑞仙。
蘆田謙利	1543～1610	兵部大輔、三郎兵衛、下野守、出家して親善院法印一跡。伊勢北高氏の一門である本道中目良康(こづりともやす)の子(弟とも)。同徳の親善院の僧となり正式と称していたが、永禄12年(1569)織田信長の伊勢侵攻に際して護衛。本道氏は元々北高氏とは不和であったため、本志は信長に降参することを勧め、本道院に信長軍を入れる。そして信長の武將蒲川一益ら將を買い、蒲川三郎兵衛頼利と名乗る。北高氏との議論により信長の2男信雄が北高自官の養子となると、謙の字を買って謙和と称す(のち頼利に改名)。その後、引継した信長を三楽寺で遊説し、信雄の北高氏兼取りの理由として以後、信雄の家老として仕え、伊賀見成や小牧長久手の戦いに活躍。天正18年(1590)に信雄が秀吉に率いて遊説されると、秀吉の改易と共に以後、謙和の家老として仕え、伊賀見成や伊勢神戶陣2万石を拝領する。慶長5年(1600)、関ヶ原合戦では西軍に属し、神戸に拠城したため改易となる。しかし、徳川秀忠のお蔭として召し出され、同8年、家督同片野で2万石を拝領し、大名として復活する。同15年(1610)2月26日、68才で没し、林徳院前法印三天御院施主として片野菩提寺等に奉られる。
蘆田正利	1500～1625	源方、熊右衛門、忠経守、藤原の長男で、母は御室家氏。慶長15年(1610)、父の死により21才で家督。これより前の同10年には、母再婚の1高に嫁い、証正直下御守に就任されている。元禄9年(1693)、大坂の陣に出陣して戦功を挙げた。しかし、以後戦場を離れる。また男子無く女成を継いだという理由により、寛永2年(1625)所領のうち1万8千石を幕府に返還。2千石の旗本となったため、片野藩は廃藩となった。正利は11月7日、36才で没し、瑞仙と号して片野菩提寺に奉られる。

第2表 片野城城主一覧



第4图 遺跡全体图 (1:100)



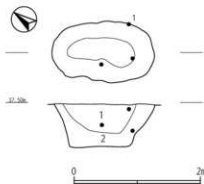
## 第3章 縄文時代

### 3-1 遺構

本遺跡からは、縄文時代早期後半のものと思われる陥穴2基、土坑1基が確認された。

#### 1号土坑 (第5図)

調査区中央部北西寄り、C-2区に位置する。主軸方位はN-37°-Wで、平面形は長楕円形を呈し、規模は長径163cm、短径95cm、深さ68cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、特に中位以下の壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもち、幅が狭い。遺物は、覆土上層から中層にかけて早期後葉、条痕文系土器3片が出土した。早期後葉の陥穴と考えられる。



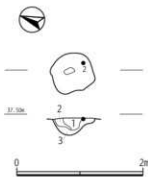
#### 1号土坑土層

- 1 7.5Y R4/6褐色土 ローム粒、ロームブロック少量混入、やや粘り欠き、やや締まる。
- 2 7.5Y R4/6褐色土 ローム粒中量、ロームブロック少量混入、やや粘り欠き、やや締まる。

第5図 1号土坑 (1:60)

#### 2号土坑 (第6図)

調査区中央部、C-3区に位置する。平面形は不整形形を呈し、規模は径72cm、深さ29cmを測る。断面は鍋底状を呈し、坑底は丸味をもつ。遺物は、覆土上層から早期後葉、鶏ヶ島台式土器1片が出土した。早期後葉の所産と考えられる。



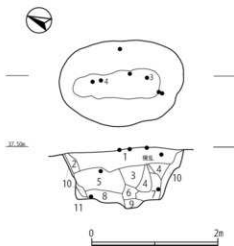
#### 2号土坑土層

- 1 7.5Y R2/3暗褐色土 ローム粒微量混入、やや粘り欠き、やや締まり欠く。
- 2 7.5Y R2/3暗褐色土 ローム粒少量混入、やや粘り欠き、やや締まり欠く。
- 3 7.5Y R4/6褐色土 ロームブロック微量混入、やや粘り欠き、やや締まり欠く。

第6図 2号土坑 (1:60)

#### 3号土坑 (第7図)

調査区北東部、B-4区に位置する。主軸方位はN-25°-Wで、平面形は長楕円形を呈し、規模は長径199cm、短径135cm、深さ95cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、特に中位以下の壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏をもち、幅が狭い。遺物は、覆土上層から下層にかけて早期後葉、条痕文系土器4片が出土した。早期後葉の陥穴と考えられる。(大橋)



#### 3号土坑土層

- 1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒少量混入、粘りもち、締まる。
- 2 7.5Y R4/6褐色土 粘りもち、締まる。
- 3 7.5Y R3/3暗褐色土 ローム粒少量混入、粘りもち、やや締まる。
- 4 7.5Y R3/3暗褐色土 ローム粒微量混入、粘りもち、やや締まる。
- 5 7.5Y R3/4暗褐色土 黄褐色土微量混入、粘りもち、やや締まる。
- 6 7.5Y R3/4暗褐色土 ロームブロック少量、暗褐色土少量混入、粘りもち、やや締まり欠く。
- 7 7.5Y R4/6褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量混入、粘りもち、やや締まり欠く。
- 8 7.5Y R4/6褐色土 ロームブロック少量混入、粘りもち、やや締まり欠く。
- 9 7.5Y R4/6褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量混入、粘りもち、締まる。
- 10 7.5Y R4/6褐色土 粘りもち、締まる。
- 11 7.5Y R4/6褐色土 粘りもち、やや締まり欠く。

第7図 3号土坑 (1:60)

### 3-2 遺物

本遺跡より検出された縄文土器の総数は12点を数える。このうち、遺構に伴うものが10点で、他の2点は表土より確認されている。出土土器の内訳は、早期前葉・撫糸文系土器（稲荷台式）1点、早期後葉・条痕文系土器（うち1点は縄ヶ島台式）11点である。検出した縄文時代の遺構からは、すべて条痕文系土器が出土している。

石器は7点出土しており、黒曜石の剥片が1点、チャートの剥片が5点である。他の時代の遺構に流れ込んでいるが、当該期の遺物である可能性はある。（小久）

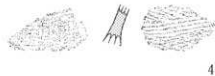
1号土坑



2号土坑



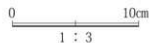
3号土坑



粘土張り遺構3面



63



第8図 出土遺物（1）

遺物番号	遺構番号	器種	部位	調査・技法	胎土	構成	色調	備考
1	1号土坑	深鉢	胴部	表裏に斜位の筋い条痕文	繊維多、白色粒子多、石英少	普通	明黄褐色	条痕文系土器
2	2号土坑	—	—	円形竹筒による刺突文、沈殿による幾何学的な区角内にも刺突文充填	金雲母多、白色粒子多、石英少	普通	明褐色	縄ヶ島台式
4	3号土坑	深鉢	胴部	表裏に扇状筋文、表面は横位、裏面は横位および斜位に筋文	繊維多、白色粒子少	普通	にぶい黄褐色	条痕文系土器
63	粘土張り遺構3面	深鉢	口縁部	口縁部わずかに肥厚、器体上の器底文を間隔をおいて筋文	黒雲母微、白色粒子多、赤色粒子微、チャート微	不良	にぶい黄褐色	稲荷台式

第3表 出土土器属性一覧

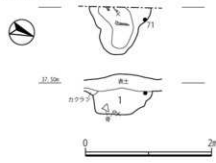
## 第4章 中世末～近世

### 4-1 遺構

本遺跡からは、いずれも中世末から近世初頭の所産と思われる土壌墓21基、火葬墓3基などが確認された。限定されたごく短期間に、墓域として機能していたものと思われる。

#### 4号土壌墓 (第9図)

調査区北西部、C-1区に位置する。遺構が調査区外にかかるため一部未調査であるが、主軸方位はおよそN-37°-Wで、平面形はおそらく楕円形を呈するものと思われる。確認している範囲で、規模は長径98cm以上、深さ40cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、墳底はやや起伏をもつ。人骨の遺存状態は悪く、足の一部と思われる骨が検出された。頭部は西にあった可能性が考えられるが、埋葬姿勢は不明である。副葬品は確認されなかった。



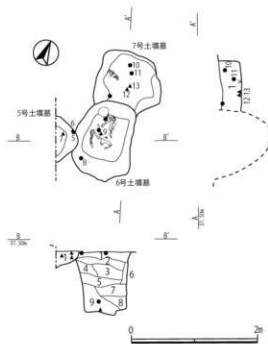
4号土壌墓土層

1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒少量、炭化物微量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。

第9図 4号土壌墓 (1:60)

#### 5号土壌墓 (第10図)

調査区北西部、C-1区に位置する。6号土壌墓を切る。遺構が調査区外にかかるため一部未調査である。そのため主軸方位、平面形等は不明である。深さは27cmを測る。断面は皿状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨は確認されなかった。副葬品は覆土中層より六道銭3枚が出土した。



5号土壌墓土層

1 7.5Y R2/3暗褐色土 ローム粒・炭灰褐色土微量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。

6号土壌墓土層

- 1 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム土中量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。
- 2 7.5Y R5/6暗褐色土 ローム土多量混入、粘性もち、締まる。
- 3 7.5Y R5/6暗褐色土 ローム土中量混入、粘性もち、締まる。
- 4 7.5Y R4/6暗褐色土 ロームブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。
- 5 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック少量混入、粘性あり、締まり欠く。
- 6 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック少量混入、粘性あり、締まり欠く。
- 7 7.5Y R4/3暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性あり、締まり欠く。
- 8 7.5Y R4/3暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性あり、締まり欠く。
- 9 7.5Y R5/6暗褐色土 ローム土主体、粘性あり、締まり欠く。

7号土壌墓土層

1 7.5Y R4/6暗褐色土 ローム粒中、ロームブロック微量混入、粘性欠き、やや締まる。

第10図 5・6・7号土壌墓 (1:60)

#### 6号土壌墓 (第10図)

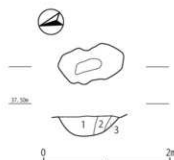
調査区北西部、C-1区に位置する。5号土壌墓に切られる。主軸方位はN-5°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長径123cm、短径87cm、深さ95cmを測る。断面は筒状を呈し、墳底はやや起伏をもつ。人骨の遺存状態は本遺跡中最も良好であった。埋葬姿勢は頭部をほぼ北にした側臥屈葬であり、顔は南西を向く。副葬品は腹部付近から六道銭6枚が出土した。他に小皿2点が出土した。須恵器片も1点出している。混入したものと思われる。

#### 7号土壌墓 (第10図)

調査区北西部、B-1区に位置する。6号土壌墓に切られる。主軸方位はN-12°-Wで、平面形は隅丸方形を呈する。規模は径105cm、深さ36cmを測る。断面は筒状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、埋葬姿勢等は不明である。副葬品は覆土下層より六道銭6枚が出土した。他に小皿3点が出土した。

### 8号土墳墓 (第11図)

調査区北西部、C-2区に位置する。主軸方位はN-7°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径104cm、短径51cm、深さ32cmを測る。断面は鍋底状を呈する。墳底は丸味をもつ。人骨・副葬品は確認されなかったが、形状や主軸方向から土墳墓の可能性が高い。



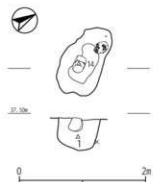
#### 8号土墳墓土層

- 1 7.5Y R4/4褐色土 ローム粒少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く、ローム土質少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。
- 2 7.5Y R4/3褐色土 ローム土質少量混入、やや締まり欠く、ローム粒・炭化物少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。
- 3 7.5Y R3/4暗褐色土

第11図 8号土墳墓 (1:60)

### 9号土墳墓 (第12図)

調査区西部、C-2区に位置する。主軸方位はN-28°-Wで、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長径121cm、短径68cm、深さ48cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、墳底はやや丸味をもつ。人骨の遺存状態は悪く、頭部の一部のみが検出された。埋葬姿勢は頭部をほぼ北にした、おそらく仰臥屈葬であったと思われる。副葬品は確認されなかったが、五輪塔の部材が1点、覆土上層より出土した。



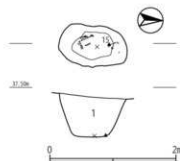
#### 9号土墳墓土層

- 1 7.5Y R4/6褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。

第12図 9号土墳墓 (1:60)

### 10号土墳墓 (第13図)

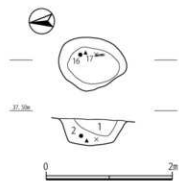
調査区北西部、C-2区に位置する。主軸方位はN-8°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径110cm、短径65cm、深さ62cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、足の骨の位置よりおそらく頭部をほぼ北にしていたものと思われる。埋葬姿勢は不明である。副葬品は覆土下層より六道銭6枚が出土した。



#### 10号土墳墓土層

- 1 2.5Y R4/6褐色土 ローム粒、ロームブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。

第13図 10号土墳墓 (1:60)



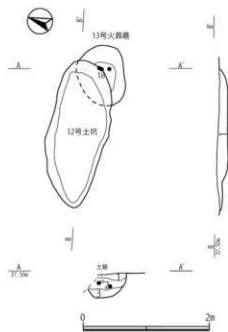
#### 11号土墳墓土層

- 1 2.5Y R3/4暗褐色土 ロームブロック、ローム粒少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。
- 2 2.5Y R4/4暗褐色土 黒褐色土質少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。

第14図 11号土墳墓 (1:60)

### 12号土坑 (第15図)

調査区中央部北寄り、B-2区に位置する。13号火葬墓を切る。主軸方位はN-79°-Eで、平面形は長楕円形を呈する。規模は長径232cm、短径93cm、深さ15cmを測る。断面は皿状を呈し、坑底はおおむね平坦である。遺物は検出されなかった。遺構の性格は不明である。



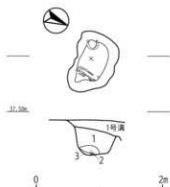
12号土坑土層

1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム少量混入、粘性もち、やや締まり欠く

13号火葬墓土層

1 7.5Y R3/3暗褐色土 ローム粒、炭化物少量混入、やや粘性もち、やや締まる。  
2 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒少量、炭化物中量混入、やや粘性もち、やや締まる。  
3 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム土主体、やや粘性もち、やや締まる。

第15図 12号土坑・13号火葬墓 (1:60)



14号土坑土層

1 7.5Y R4/6暗褐色土 炭化物少量、ロームブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。  
2 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒、黒褐色土少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。  
3 7.5Y R4/6暗褐色土 磨治軽石主体、やや粘性欠き、締まり欠く。

第16図 14号土坑 (1:60)

### 13号火葬墓 (第15図)

調査区中央部北寄り、B-3区に位置する。主軸方位はN-59°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径96cm、短径69cm、深さ35cmを測る。断面は鍋底状を呈し、坑底はおおむね平坦である。覆土は多量に炭が混じった黒褐色土からなり、骨片、焼土粒を含むことから火葬墓と思われる。遺物は覆土中層より、小皿が2点出土している。被熱痕はみられない。他に須恵器片1点が出土している。混入したものと思われる。

### 14号土坑 (第16図)

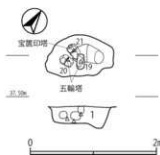
調査区北部、B-2区に位置する。1号溝に切られる。主軸方位はN-86°-Wで、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長径100cm、短径62cm、深さ44cmを測る。断面は鍋底状を呈し、坑底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、頭部と足の骨の一部が検出されただけである。埋葬姿勢はおそらく頭部をほぼ西にした仰臥屈葬である。副葬品は確認されなかった。

### 15号土坑 (第17図)

調査区中央部北寄り、D-3・4区に位置する。主軸方位はN-38°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径110cm、短径67cm、深さ26cmを測る。断面はおおよそ鍋底状を呈し、坑底は北東側が一段下がる。遺物は覆土上層から中層にかけて五輪塔部材2点、宝篋印塔部材1点が出土した。人骨は確認されなかった。

### 16号土坑 (第19図)

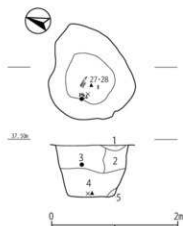
調査区中央部、C-3区に位置する。道路状遺構、21号火葬墓に切られる。主軸方位はN-87°-Eで、平面形は円形を呈する。規模は長径156cm、短径120cm、深さ115cmを測る。断面は筒状を呈し、坑底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、頭部と足の骨の一部が検出されただけである。埋葬姿勢は頭部をほぼ東にした側臥屈葬であり、顔は北を向いていたようである。副葬品は腹部付近から六道銭6枚が出土した。



#### 15号土塚墓土層

- 1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒多量、炭化物、焼土粒微量混入、やや粘性もち、やや締まる。

第17図 15号土塚墓 (1:60)



#### 17号土塚墓土層

- 1 7.5Y R5/6暗褐色土 ローム土主体、やや粘性あり、やや締まり欠く。  
 2 7.5Y R5/6暗褐色土 ロームブロック多量混入、やや粘性あり、やや締まり欠く。  
 3 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック微量混入、やや粘性あり、やや締まり欠く。  
 4 7.5Y R4/6暗褐色土 ロームブロック少量混入、やや粘性あり、やや締まる。  
 5 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム土主体、粘性あり、締まる。

第18図 17号土塚墓 (1:60)

#### 17号土塚墓 (第18図)

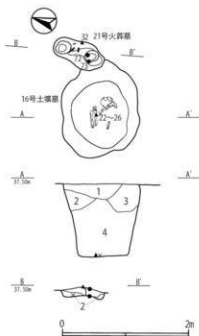
調査区中央部、C-3区に位置する。主軸方位はN-48°-Eで、平面形は円形を呈する。規模は長径162cm、短径132cm、深さ82cmを測る。断面は筒状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、足の骨の一部が検出されただけである。埋葬姿勢は不明である。副葬品は覆土下層から六道銭6枚が出土した。覆土中層からは縄文土器片が1点出土している。混入したものと思われる。

#### 18号土塚墓 (第20図)

調査区中央部北寄り、B-3区に位置する。主軸方位はN-9°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径129cm、短径63cm以上、深さ44cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底はおおむね平坦である。骨の遺存状態は悪く、頭部と足の骨の一部が検出されただけである。埋葬姿勢はおそらく頭部をほぼ北にした側臥屈葬であり、顔は南を向いていたようである。副葬品は確認されなかった。

#### 19号土塚墓 (第21図)

調査区中央部、C-3区に位置する。主軸方位はN-6°-Wで、平面形は円形を呈する。規模は長径96cm、短径76cm以上、深さ59cmを測る。断面は筒状ない



#### 16号土塚墓土層

- 1 7.5Y R4/3暗褐色土 炭化物中量、ローム粒少量混入、やや粘性欠き、締まる。  
 2 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム粒多量、炭化物微量混入、粘性もち、やや締まり欠く。  
 3 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量混入、やや粘性欠き、やや締まり欠く。  
 4 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量混入、やや粘性欠き、締まり欠く。

#### 21号火葬墓土層

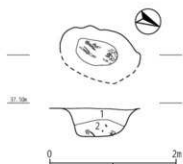
- 1 7.5Y R2/3暗暗褐色土 炭化物、焼土粒、骨片多量、ロームブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。  
 2 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム土主体、炭化物微量混入、やや粘性欠き、やや締まる。

第19図 16号土塚墓・21号火葬墓 (1:60)

し鍋底状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、頭部の一部と足の骨が検出されただけである。埋葬姿勢は頭部をほぼ北にし、おそらく側臥屈葬であったと思われる。顔は南を向く。副葬品は六道銭6枚、他に五輪塔の部材が2点、覆土上層より出土した。

#### 20号土墳墓 (第22図)

調査区中央部、C-4区に位置する。道路状遺構を切る。主軸方位はN-12°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径67cm、短径43cm、深さ25cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底はやや丸味をもつ。人骨、副葬品は確認されなかった。形状や主軸方向から土墳墓の可能性が高い。

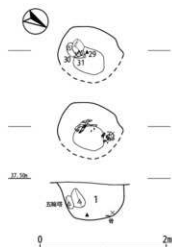


16号土墳墓土層  
1 7.5V R4.6褐色土 ローム状塊層混入、やや粘性もち、やや締まる。  
2 7.5V R4.6褐色土 ローム状少量混入、やや粘性もち、やや締まり欠く。

第20図 18号土墳墓 (1:60)

#### 21号火葬墓 (第19図)

調査区中央部、C-3区に位置する。16号土墳墓を切る。主軸方位はN-5°-Eで、平面形は不整形円形を呈する。規模は長径80cm、短径40cm、深さ14cmを測る。断面は皿状を呈し、墳底は起伏をもつ。覆土は多量に炭が混じった黒褐色土からなり、骨片、焼土粒を含むことから火葬墓と思われる。遺物は覆土上層から六道銭1枚が出土した。また、円筒状をした土製品が2点出土しており、被熱痕がみられる。



19号土墳墓土層  
1 7.5V R4.6褐色土 炭化物、骨片混入、ロームブロック塊層混入、やや粘性もち、やや締まる。

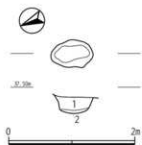
第21図 19号土墳墓 (1:60)

#### 22号土墳墓 (第23図)

調査区南東部、D-4区に位置する。29号土墳墓を切る。主軸方位はN-20°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径97cm、短径64cm、深さ33cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、頭部の一部と足の骨が検出されただけである。頭部を北にしているが、埋葬姿勢は不明である。他に小皿が1点、土師器片2点が出土した。土師器は混入したものと思われる。

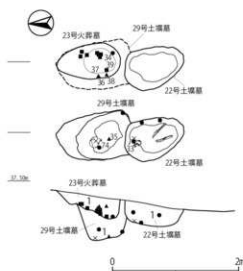
#### 23号火葬墓 (第23図)

調査区南東部、D-4区に位置する。29号土墳墓の上部に掘り込んでいる。主軸方位はN-3°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径99cm、短径55cm、深さ28cmを測る。断面はおおよそ鍋底状を呈し、墳底は南側が低く、北側が高い。覆土は多量に炭が混じった黒褐色土からなり、骨片、焼土粒を含むことから火葬墓と思われる。遺物は覆土下層から六道銭3枚、角釘8点、小皿が1点出土した。被熱痕はみられない。他に被熱痕のみられる粘板岩の破片が多く混入していた。



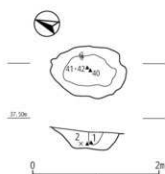
20号土墳墓土層  
1 7.5V R4.6褐色土 ローム状塊層混入、やや粘性欠き、締まる。  
2 7.5V R4.6褐色土 ロームブロック少量混入、やや粘性もち、締まる。

第22図 20号土墳墓 (1:60)



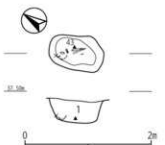
- 22号土壌層土層  
1 7.5V R4/4褐色土 灰黄色粘土、ローム粒、骨片少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。
- 23号火葬層土層  
1 7.5V R2/1黒色土 炭化物主体、ローム粒、焼土粒、骨片、炭化物多量混入、粘性欠き、やや締まる。
- 29号土壌層土層  
1 7.5V R3/4褐色土 ローム土多量混入、やや粘性欠き、締まる。

第23図 22・29号土壌層 23号火葬層 (1:60)



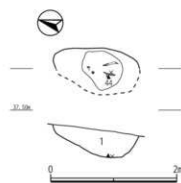
- 24号土壌層土層  
1 7.5V R3/4褐色土 ローム粒少量、灰黄色粘土ブロック少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。  
2 7.5V R3/4褐色土 ローム粒少量、やや粘性欠き、やや締まる。

第24図 24号土壌層 (1:60)



- 25号土壌層土層  
1 7.5V R4/4褐色土 炭化物少量混入、やや粘性欠き、やや締まる。

第25図 25号土壌層 (1:60)



- 26号土壌層土層  
1 7.5V R4/4褐色土 ロームブロック、灰黄色粘土ブロック多量混入、やや粘性欠き、締まる。

第26図 26号土壌層 (1:60)

#### 24号土壌層 (第24図)

調査区南東部、C-4区に位置する。主軸方位はN-13°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径120cm、短径78cm、深さ23cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底は起伏をもつ。人骨の遺存状態は悪く、頭部の骨の一部が検出されただけである。頭部を北東にしていたものと思われるが、埋葬姿勢は不明である。副葬品は六道銭6枚が出土した。

#### 25号土壌層 (第25図)

調査区中央部東寄り、C-4区に位置する。道路状遺構を切る。主軸方位はN-16°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径89cm、短径54cm、深さ36cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底はおおむね平坦である。人骨の遺存状態は悪く、頭部と足の骨の一部が検出されただけである。頭部を北にしていたものと思われるが、埋葬姿勢は不明である。副葬品は六道銭6枚が出土した。

#### 26号土壌層 (第26図)

調査区南東部、D-4区に位置する。粘土貼り遺構を切る。主軸方位はN-1°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径137cm、短径75cm、深さ39cmを測る。断面は鍋底状を呈し、墳底は北側が高く、南側が低い。人骨の遺存状態は悪く、足の骨の一部が検出されただけである。頭部を北にしているが、埋葬姿勢は不明である。副葬品は六道銭6枚が出土した。

#### 27号土壌層 (第27図)

調査区南東部、D-5区に位置する。粘土貼り



遺構を切る。主軸方位はN-58°-Eで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径120cm、短径72cm、深さ43cmを測る。断面は鍋底状に近いが、東側と西側にテラスをもつ。壙底はやや丸味をもつ。人骨は出土していない。副葬品は六道銭1枚が出土した。

#### 28号土坑 (第28図)

調査区東部、C-4区に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径71cm、深さ23cmを測る。断面は筒状を呈し、坑底はおおむね平坦である。遺構の性格は不明である。

#### 29号土壙墓 (第23図)

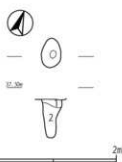
調査区南東部、D-4区に位置する。22号土壙墓、23号火葬墓に切られる。主軸方位はN-1°-Wで、平面形は楕円形を呈する。規模は長径120cm、短径74cm、深さ67cmを測る。断面は筒状ないし鍋底状を呈し、北側にテラスをもつ。頭部の骨の一部が検出されただけである。頭部を北にしていたようである。埋葬姿勢については不明である。副葬品は六道銭6枚が出土した。覆土下層より小皿2点が出土している。

#### 1号ピット (第29図)

調査区北西部、B-1区に位置する。平面形は、楕円形を呈する。規模は長径48cm、短径30cm、深さ60cmを測る。

#### 2号ピット (第30図)

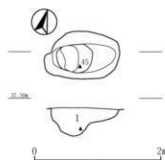
調査区東部、C-4区に位置する。道路状遺構を切る。主軸方位はN-85°-Eで、平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長径80cm、短径55cm、深さ77cmを測る。



#### 1号ピット土層

- 1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒少量混入。粘性欠き。締まる。
- 2 7.5Y R4/6暗褐色土 ロームブロック。ローム粒少量混入。やや粘性もち。やや締まる。

第29図 1号ピット (1:60)



#### 27号土壙墓土層

- 1 7.5Y R3/4暗褐色土 ロームブロック。ローム粒少量混入。やや粘性もち。締まる。

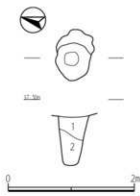
第27図 27号土壙墓 (1:60)



#### 28号土坑土層

- 1 7.5Y R4/4暗褐色土 ロームブロック少量混入。やや粘性欠き。やや締まる。
- 2 7.5Y R4/4暗褐色土 ローム土主体。やや粘性もち。締まる。

第28図 28号土坑 (1:60)



#### 2号ピット土層

- 1 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒多量。灰黄色粘土ブロック。炭化物少量混入。やや粘性欠き。やや締まり欠き。
- 2 7.5Y R3/4暗褐色土 ローム粒多量。灰黄色粘土ブロック。炭化物微量混入。やや粘性欠き。やや締まり欠き。

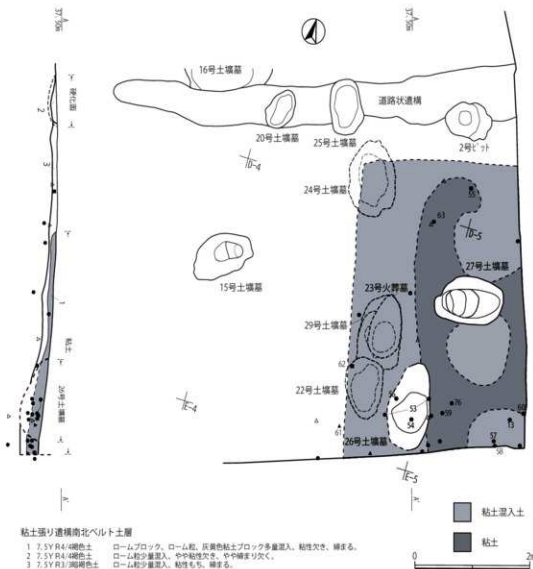
第30図 2号ピット (1:60)

### 粘土貼り遺構 (第31図)

調査区南東部に位置する。調査区外にかかるため、全容は明らかではないが、平面形はおおよそ方形を呈する。規模は長径 4.6 m 以上、短径 3 m 以上、厚さ 10 ~ 30 cm を測る。灰黄褐色粘土で固められている部分と粘土混じりの土で固められている部分がある。いずれも硬く締まる。平坦面確保のため、整地したと思われる。26・27号土壌墓は整地面より掘り込まれている。22・24・29号土壌墓、23号火葬墓は整地面の下、3層上面に作られている。更に3層下の地山面に柱穴列が分布しており、都合3面が確認された。遺物は、第1面からは小皿2点、瀬戸・美濃系の播鉢、石塔の部材の一部、装飾金具の一部と思われる金属製品等が出土した。混入したチャートの剥片石器、土師器片なども見受けられる。第2面からは土師質土器14点、銭貨、青銅製の鉄砲玉等が出土した。土師器・須恵器片・黒曜石の剥片なども出土している。第3面からは、銭貨片、縄文土器片、チャートの剥片等が出土した。

### 道路状遺構 (第31図)

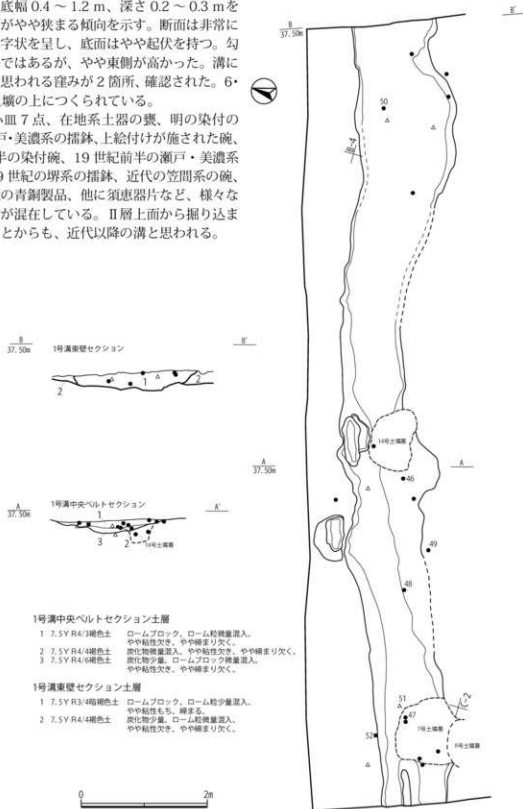
調査区東部、C-3・4区に位置する。調査区外にかかるため、全容は明らかではない。主軸方向はN-72°-Eで、おおよそ東西に走る。確認した範囲で7m以上、幅50~70cmを測る。中央部分がU字状に窪んでおり、表面が硬化している。硬化した土の厚さはおおよそ5cmであった。遺物は確認されなかった。20・25号土壌墓、2号ピットに切られ、16号土壌墓の上につくられている。墓域が機能していたある時期、短期間使用されていたものと思われる。



### 1号溝 (第32図)

調査区の北部、B-1～4区まで走る。両端とも更に調査区外へ伸びるものと思われる。主軸方向はN-73°-Eで、全長12.5m、残存部の上幅1～1.7m、底幅0.4～1.2m、深さ0.2～0.3mを測る。西側がやや狭まる傾向を示す。断面は非常に緩やかなU字状を呈し、底面はやや起伏を持つ。勾配は緩やかではあるが、やや東側が高かった。溝に伴うものと思われる窪みが2箇所、確認された。6・7・14号土壌の上につくられている。

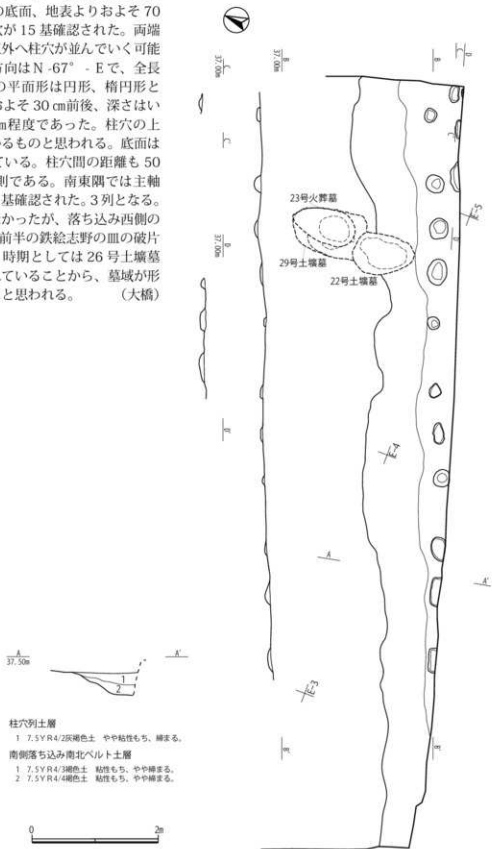
遺物は小皿7点、在地系土器の甕、明の染付の端反碗、瀬戸・美濃系の播鉢、上絵付けが施された碗、17世紀後半の染付碗、19世紀前半の瀬戸・美濃系の播鉢、19世紀の堺系の播鉢、近代の空閑系の碗、砥石、筒状の青銅製品、他に須臾器片など、様々な時期の遺物が混在している。II層上面から掘り込まれていることから、近代以降の溝と思われる。



第32図 1号溝 (1:60)

### 柱穴列（第33図）

調査区の南部、E-2～5区に位置する。南側の落ち込みの底面、地表よりおよそ70cmの地山面で柱穴が15基確認された。両端とも、更に調査区外へ柱穴が並んでいく可能性がある。主軸方向はN-67°-Eで、全長約9m、各柱穴の平面形は円形、楕円形と不規則で、径はおよそ30cm前後、深さはいずれもおよそ5cm程度であった。柱穴の上部が削平されているものと思われる。底面はいずれも硬化している。柱穴間の距離も50～110cmと不規則である。南東隅では主軸の異なる柱穴が4基確認された。3列となる。遺物は確認されなかったが、落ち込み西側の覆土より17世紀前半の鉄絵志野の皿の破片が出土している。時期としては26号土壌墓の下部につくられていることから、墓域が形成される以前のもと思われる。（大橋）



## 4-2 遺物

中・近世の遺物は、土師質土器・陶磁器・金属製品・石塔・粘板岩など、合計 260 点が出土した。小皿は調査区全体で 40 点出土した。このうち土壌墓から出土した 15 点は、出土状況などからみて埋葬に伴うものであった可能性が高い。小皿(3)は 3 号土坑確認面で検出されたものであり、本土坑に直接伴うものではない。法量は 10 cm 前後のものど 5 cm 前後のものがあり、法量の大きなものは口縁部が外反するもの(8・18)と、外反しないで直線的に立ち上がるものに分けられる。法量の小さなものは直線的に立ち上がるもの(57・58)と、内湾し体部に厚みが有るものに分けられる。ロクロ成形を主体としている。切り離し技法は、静止系切り未調整の 60 を除いて、すべて回転系切り未調整である。底部がやや突出するものが多い点も共通する。胎土・焼成には大きな違いがみられる。法量の小さなものは赤褐色を呈し、胎土に雲母片を多量に含むが、法量の大きなものは橙褐色ないし橙色を呈し、雲母片がほとんど含まれない。法量の大きなものは土浦市土浦城第 IV 層出土例と法量・口縁部形態・体部および底部の厚さなどが類似しており、16 世紀後半～17 世紀初頭に比定されていることから、本遺跡出土の小皿についても同様の年代を考えておきたい。

陶磁器は 28 点出土した。表土採集例がほとんどであり、遺構に伴うものは 1 号溝の 3 点と少ない。48 は端反碗の口縁部片で、外面と内面に明青灰色の一条團線が引かれている。16 世紀末から 17 世紀の明代の貿易磁器である。49 は碗の破片で、外面に上絵付けが施されている。瀬戸・美濃系の陶器である。67 は端反碗の口縁部から胴部にかけての破片で、17 世紀中葉の肥前系の磁器である。70 は底部に「粟田」の文字が刻印されている陶器である。京焼系と思われる。搦鉢は 5 点出土している。46・47 は 1 号溝から出土している。46 は妬器。口縁より胴部にかけての破片である。時期は 19 世紀、堺系であろう。47 は口縁から胴部にかけての陶器破片である。19 世紀前半、瀬戸・美濃系と思われる。

金属製品は、銭貨 79 点、釘 8 点、キセル 1 点、球状金属製品 2 点、不明 3 点が出土した。銭貨は 15 基の土壌墓から発見されており、埋葬に伴う六道銭と考えられる。このうち、7・10・23・24・26 号土壌出土例は布または紙状のものが附着しており、埋納状況がうかがえる資料である。銭種を判別できる例のうち、24 号土壌出土の咸平元宝以外はすべて永楽通寶で占められており、その比率は極めて高い。鈴木公雄氏の研究(鈴木 1999)によれば、六道銭に使われた全渡来銭中、永楽銭の占める割合は 16% ほどといわれることから、本遺跡における永楽銭の出土状況は際立って高いことが指摘される。また、壺着している銭貨の中には永楽銭以外のものが 3 枚ほど含まれるが、他のものは大きさから永楽銭の可能性が高く、これを加えると永楽銭の割合はさらに高くなる。こうした現象は「結城氏新法度」や後北条氏の通達に見られるような永楽銭精銭化の一事例としての選銭とも思えるが、資料の絶対数が少ないため、断定は避けたい。時間的には、1636 年頃初鋳の古寛永通寶がまったく確認されなかったことから、永楽銭の東国流通が拡大を見た中世後半から近世初頭段階に埋納された可能性が高い。土壌墓に埋納された銭貨の枚数は、同じく上記鈴木氏の論考によれば、浅い土壌墓では出土枚数にある程度の幅が見られるのに対し、深い土壌墓の場合は 6 枚が中心であったといわれる。本遺跡でも 6 枚という枚数はかなり厳密に守られており、永楽銭を意図的に選んで埋納していることと合わせて、注目される事実といえる。永楽銭の選銭は埋葬者の身分を考える上での有力な考察資料ともなりうるからである。

次に釘であるが、これは火葬墓と考えられる 23 号土壌のみの出土である。1号溝出土のキセルは形状から吸い口部であろう。2点の球状金属製品は径約1cmほどを測り、鉄砲玉(3匁玉)と思われる。粘土張り遺構と確認面からの出土であり、時期は不明である。その他の金属製品は主に近世の1号溝や表土層からの出土であり、同じく時期は不明である。

石塔の部材(五輪塔5点、宝篋印塔1点、不明2点)は8点出土した。残りの良い6点は土壌墓内からの出土である。他2点は小破片であるが、材質などから見て石塔の一部と思われる。形状や出土状況から土壌墓と同じ時期のものと考えられる。

この他、須恵器の細片が10点出土している。土壌墓の上面から出土したのも見られるが、混入であろう。時期は9世紀以降のものと考えられる。(林・小久)

3号土坑



3

5号土壌墓



5

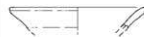


6



7

6号土壌墓

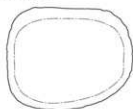


8



9

9号土壌墓



14

0 10cm

1 : 2  
(5・6・7・9・12・13・15・17)

7号土壌墓



10



11



12



13

10号土壌墓



15



11号土壌墓



16



17



0 10cm

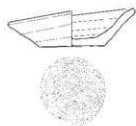
1 : 3  
(3・8・10・11・16)

0 10cm

1 : 6  
(14)

第34図 出土遺物(2)

13号火葬墓

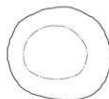


18

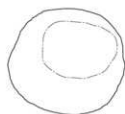
15号土壙墓



19



20



21



16号土壙墓



22



23



24



25



26

17号土壙墓



27



28

19号土壙墓



29



30



31

21号火葬墓



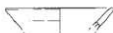
32

22号土壙墓



33

23号火葬墓



34



35



36



37



38

0 10cm

1 : 2  
(22~29 · 32 · 35~38)

0 10cm

1 : 3  
(18 · 33 · 34)

0 10cm

1 : 6  
(19~21 · 30 · 31)

第35图 出土遺物(3)

24号土壙墓



39



40



41

25号土壙墓



42



43

27号土壙墓



44

29号土壙墓



45

1号溝



46



47



48



49

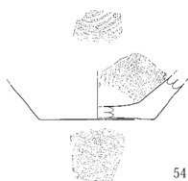


50



52

粘土張り遺構 1 面



54



55

粘土張り遺構 1・2 面



53

粘土張り遺構 2 面



56



57



58



59



60



61



62

0 10cm

1 : 2

(39~45・51・52・55・61・62)

0 10cm

1 : 3

(46~50・53・54・56~60)

第 36 図 出土遺物 (4)



南側落ち込み一括



64

遺構確認面



65



66

表土一括



67



68



69



70

0 10cm

1 : 2  
(66・68・69)

0 10cm

1 : 3  
(64・65・67・70)

第 37 図 出土遺物 (5)

第 4 表 出土土器・陶磁器属性一覧

遺物 番号	出土地点 遺構	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調色・技法	胎土	構成	色調	備考
3	3号土坑	土師瓦 土器	小皿	口縁部 ～底部	66.80	1.55	(3.6)	口縁部ナデ。底部に軸糸切痕ナデ。中や底 部が突出し、体部中央で内湾してたち上がる。 口縁部磨丸	金雲母焼。白色・ 赤色粒子微	普通	褐色	法量小
8	6号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部	10.33	1.8	—	口縁部クロナデ。口縁部中や外反する。 口縁部磨丸	白・赤色粒子多	普通	褐色	法量大
10	7号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部 ～底部	5.33	1.35	(3.6)	口縁部ナデ。底部に軸糸切痕ナデ底部より 内湾してたち上がる。口縁部磨丸	金雲母焼。白 色・赤色粒子微。 石瓦多。變少	普通	にぶい黄 褐色	法量小
11	7号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部 ～底部	9.43	2.9	(5.0)	口縁部から体部クロナデ。底部磨丸口縁 部より直線的に立ち上がる。口縁部磨丸	金雲母焼。白 色・赤色粒子微	普通	褐色	法量大
16	11号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部 ～底部	9.53	2.9	3.0	口縁部から体部クロナデ。見込み部ゴ コナデ。底部に軸糸切。底部より直線的に 立ち上がる。口縁部磨丸	金雲母焼。 白・赤色粒子微。 チヤート少	普通	にぶい黄 褐色	法量大
18	13号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部 ～底部	9.9	2.9	3.2	口縁部から体部クロナデ。見込み部クロ ナデ。右側に軸糸切。底部より直線的に立ち 上がる。口縁部は外反する。口縁部磨丸	白・赤色粒子中	普通	褐色	法量大
33	22号土壇墓	土師瓦 土器	小皿 (灯明皿)	口縁部 ～底部	6.63	1.4	(4.5)	口縁部から体部クロナデ。底部明確し不 明。底部より内湾してたち上がる。口縁部 磨丸	金雲母多。 白・赤色粒子少	普通	にぶい黄 褐色	法量小。口縁部 磨にチヤール付着
34	23号土壇墓	土師瓦 土器	小皿	口縁部	8.23	(1.7)	—	クロナデ。口縁部中や外反する	金雲母焼。 白色粒子微	普通	黄褐色	法量大
46	1号溝	磁器	磁鉢	～胴部	(27.6)	(8.5)	—	口縁部外縁部に北側1条。口縁部折り返し (欠損)。折り目数不明			明赤褐色	擦糸。19 C。 焼熱
47	1号溝	陶器	磁鉢	～胴部	(26.6)	(6.1)	—	口縁部下位折段。口縁部内外側につまみ出 される。折り目数不明			褐色	磨丸・美濃系。 折く前平
48	1号溝	磁器	鉢	口縁部	9.63	(2.0)	—	口縁部内・外に一葉の磨丸			明青灰色	陶瓦焼。16 C 末～17 C明代。 管輪磨丸
49	1号溝	陶器	碗?	体部	—	(3.4)	—	上縁付が傷されている			オリーブ 黄色	磨丸・美濃系。 近世

50	1号溝	陶器	碗	口縁部 ～縁部	[10.4]	(3.3)	—	口縁部が大きく欠ける		オリーブ 色	笠原系、近代	
53	粘土張り遺構 1・2面	土器質 土器	小皿	口縁部 ～底部	[9.0]	(2.7)	[4.0]	口縁部から体部にかけて、底部は底縁部、 やや底部が突出し、体部は直線的に立ち上がる。 口縁部端丸	金雲母多、白・ 赤色粘土質	普通	褐色	法量大
54	粘土張り遺構 1面	陶器	椀鉢	胴部 ～底部	—	(3.3)	[9.0]	縦溝目縁あり、器口目数不明、高台無し			褐色	瀬戸・美濃系、 18 C
56	1号溝	土器質 土器	小皿 (打明皿)	完形	5.7	1.7	3.6	口縁部により成形、底部は底縁部、底 部やや突出しやや内湾しながら立ち上がる。 口縁部端やや鋭角	白雲母質、白・ 黒色粘土少、チ ャート層	普通	にぶい・黄 褐色	法量小、内湾部 付着
57	粘土張り遺構 2面	土器質 土器	小皿 (打明皿)	完形	5.6	1.6	3.0	口縁部成形、右は底縁部、底部突出し直線 的に立ち上がる。口縁部端やや鋭角	白雲母質、白色 粘土少、赤色粘 土質	普通	にぶい・黄 褐色	法量小、外湾部 付着、口縁部に タール付着
58	粘土張り遺構 2面	土器質 土器	小皿 (打明皿)	口縁部 ～底部	[6.2]	1.8	[3.8]	口縁部成形、右は底縁部、底部突出し直線 的に立ち上がる口縁部わずかに内湾、口縁 部端丸	白雲母質、白色 粘土少、赤色粘 土質、砂鉄質	普通	褐色	法量小
59	粘土張り遺構 2面	土器質 土器	小皿	口縁部 ～底部	10.0	2.8	4.5	底縁部目縁部、見込み部チヤを強く削いる。 底部やや突出し直線的に立ち上がる。口縁 部端丸	砂鉄多、白・赤 ・黒色粘土子質	良	褐色	法量大
60	粘土張り遺構 2面	土器質 土器	小皿 (打明皿)	完形	5.6	1.8	3.8	口縁部成形、静止系切、底部やや突出し直線 的に立ち上がるが体部中央でやや内湾し 垂直に立ち上がる。口縁部端丸	金雲母質、白・ 赤色粘土質	普通	にぶい・黄 褐色	法量小
64	南側溝はたき 一板	土器質 土器	小皿	口縁部 ～底部	[6.2]	1.9	[3.6]	口縁部成形、底部やや突出し僅かに内湾しな がら立ち上がる。口縁部端丸	白色粘土中、赤 色粘土少、黒色 粘土質、砂鉄質	普通	黄褐色	法量小
65	竈跡	瓦質土器	鉢	口縁部 ～胴部	[25.4]	(9.4)	—	胴部縦方向強いミガキ、口縁部上面平らに して外側に把握する	黒雲母中、白色 粘土中	良	にぶい・黄 褐色	在処系？
67	表土 一括	磁器	碗	口縁部 ～胴部	[9.4]	(3.1)	—	柱状樹皮文か			明緑灰色	美濃系、瀬戸系、 17 C中系
70	表土 一括	陶器	急須？	底部	—	(2.1)	[6.6]	底部に「粟山」の烙印、焼熱しているため 釉が削げる			灰黄褐色	京焼系

第5表 出土銭貨属性一覧

通物 番号	遺構番号	種類	枚数	長さ (cm)	孔幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形跡	備考
5	5号上層部	永楽通寶	1	2.45	0.62	0.10	1.7	1408	布付着
6	5号上層部	永楽通寶	1	2.55	0.62	0.12	3.5	1408	
7	5号上層部	永楽通寶	1	2.45	0.60	0.12	3.1	1408	
9A	6号上層部	永楽通寶他	6	2.55	0.58	0.12	—	—	
9B				2.55	—	0.11	—	—	
9C				2.52	—	0.12	22.8 (6枚 セット)	—	6枚検出、永楽通寶1枚他不明
9D				2.49	—	0.12	—	—	
9E				2.50	—	0.15	—	—	
9F	2.50	0.58	0.15	—	—				
12A	7号上層部	永楽通寶他	3	2.48	0.58	0.12	—	—	
12B				2.50	—	0.12	10 (3枚セ ット)	—	永楽通寶2枚他不明、紙状物質付着
12C				2.48	0.60	0.12	—	—	
13A	7号上層部	永楽通寶	2	2.45	0.65	0.12	6.3 (2枚 セット)	1408	2枚検出、紙状物質付着
13B				2.50	0.60	0.12	—	1408	
15A				2.55	0.62	0.15	—	—	
15B	10号上層部	不明	6	2.50	—	0.15	—	—	
15C				2.55	—	0.12	19.1 (6枚 セット)	—	6枚検出・布付着、紙付着
15D				2.52	—	0.12	—	—	
15E				2.48	—	0.11	—	—	
15F				2.48	0.60	0.10	—	—	
17A	11号上層部	永楽通寶他	6	2.52	0.61	0.10	—	—	
17B				2.48	—	0.13	—	—	
17C				2.52	—	0.15	20.3 (6枚 セット)	—	6枚検出・永楽通寶2枚他不明
17D				2.48	—	0.15	—	—	
17E				2.50	—	0.12	—	—	
17F				2.45	0.61	0.12	—	—	
22	16号上層部	永楽通寶	1	2.50	0.60	0.12	3.5	1408	
23	16号上層部	永楽通寶	1	2.65	0.60	0.12	3.4	1408	
24	16号上層部	永楽通寶	1	2.68	0.58	0.15	3.6	1408	
25	16号上層部	永楽通寶	1	2.65	0.60	0.12	2.9	1408	
26A	16号上層部	不明	2	2.48	0.58	0.12	6.9 (2枚セ ット)	—	2枚検出
26B				2.48	0.60	0.12	—	—	

27	17号土曜墓	永楽通寶	1	2.68	0.58	0.18	3.4	1408	
28-A				2.50	0.58	0.15			
28-B				2.51	—	0.15			
28-C	17号土曜墓	永楽通寶	5	2.48	—	0.12	18.2 (5枚 セット)	—	5枚鑑査, 永楽通寶1枚不明
28-D				2.45	—	0.12			
28-E				2.50	0.60	0.12			
29-A				2.50	0.60	0.12			
29-B				2.50	—	0.12			
29-C				2.50	—	0.12			
29-D	19号土曜墓	永楽通寶	6	2.50	—	0.12	21.8 (6枚 セット)	—	6枚鑑査, 永楽通寶2枚不明
29-E				2.52	—	0.12			
29-F				2.48	0.60	0.12			
32	21号火葬墓	永楽通寶	1	2.52	0.58	0.12	3.8	1408	
35-A				2.52	0.58	0.1			
35-B				—	—	0.1			
35-C	29号土曜墓	不明	6	2.50	—	0.1	19.5 (6枚 セット)	—	6枚鑑査, 布付前
35-D				—	—	0.1			
35-E				—	—	0.1			
35-F				2.50	—	2.0			
36	23号火葬墓	永楽通寶	1	2.5	0.58	0.12	2.9	1408	
37	23号火葬墓	永楽通寶	1	2.65	0.6	0.1	2.4	1408	
38-A				2.50	0.6	0.15	0.8 (6枚セ ット)	—	3枚鑑査, 永楽通寶2枚不明 (永楽ではないもの否)
38-B	23号火葬墓	永楽通寶	3	2.45	0.58	0.12		—	
38-C				2.55	0.58	0.11		—	
40-A				2.45	0.58	0.15		—	
40-B	24号土曜墓	永楽通寶	3	2.48	—	0.12	9.9 (3枚セ ット)	—	3枚鑑査, 永楽通寶2枚不明 (永楽ではないもの否), 布付前, 箱蔵
40-C				2.5	0.55	0.12		—	
41	24号土曜墓	咸平元宝	1	2.45	0.6	0.12	2.6	998	
42-A				2.65	—	0.16	7.4 (2枚セ ット)	—	2枚鑑査, 布付前
42-B	24号土曜墓	不明	2	2.65	0.58	0.16		—	
43-A				2.52	0.52	0.15		1408	
43-B				2.52	—	0.12		1408	
43-C				2.52	—	0.12		1408	
43-D	25号土曜墓	永楽通寶	6	2.58	—	0.12	21.8 (6枚 セット)	—	6枚鑑査, 永楽通寶1枚不明 (不明内1枚は永楽以外), 鑑状物付前
43-E				2.55	—	0.12		1408	
43-F				2.55	0.58	0.12		1408	
44-A				2.50	0.6	0.12		—	
44-B				2.52	—	0.12		—	
44-C				2.51	—	0.15		20.9 (6枚 セット)	—
44-D	26号土曜墓	不明	6	2.48	—	0.12		—	6枚鑑査, 鑑状物付前
44-E				2.50	—	0.15		—	
44-F				2.50	0.58	0.12		—	
45	27号土曜墓	永楽通寶	1	2.45	0.55	0.12	1.4	1408	
61	粘土器(遺構) 2室	不明	1	2.25	0.7	0.12	1.7	—	
68	表土一括	永楽通寶	1	2.45	0.55	0.12	3.5	1408	
69	表土一括	永楽通寶	1	2.5	0.6	0.12	2.8	1408	

※第34・35・36図にて真贋の重なっている図は、属性表と上からアルファベット順に対応している。

第6表 出土金属製品属性一覧

遺物 番号	出土地点 遺構	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
39	23号火葬墓	釘	4.5	0.7	0.3	3.0	上端部をつぶし横方向に折り曲げる
52	1号溝	半七弁	5.2	5.9	0.5	3.1	喉いり部
55	粘土器(遺構)上面	不明	2.8	2.5	0.9	2.3	真贋未詳?
62	粘土器(遺構)上面	鉄砲玉	1.2	1.2	1.1	5.9	真贋未詳?
66	遺構(遺構)上面	鉄砲玉	1.3	1.3	1.2	11.3	真贋未詳?、3号土1号=37.5g

第7表 出土石製品属性一覧

遺物 番号	出土地点 遺構	種別	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
14	9号土曜墓	五輪苧	空風輪	25.0	20.1	16.5	12000	花崗岩
19	15号土曜墓	五輪苧	空風輪	24.5	12.3	12.8	4840	花崗岩
20	13号土曜墓	五輪苧	空風輪	22.2	16.6	14.8	7560	花崗岩
21	15号土曜墓	宝篋印石	形輪	27.1	18.4	16.8	9800	花崗岩
30	19号土曜墓	五輪苧	水輪	10.4	21.6	(19.4)	(6700)	花崗岩
31	19号土曜墓	五輪苧	地輪	11.5	22.0	(19.2)	(7520)	花崗岩
51	1号溝	砥石		(7.1)	2.9	2.5	77.3	凝灰岩

## 第5章 総括

### 1. はじめに

今回の調査地点は片野城の南端、城内最大の曲輪であるⅦの東側虎口に近い平坦面に位置しており、発掘によって縄文時代早期後葉の陥穴3基、中世末から近世初頭の土壇墓21基、火葬墓3基、性格不明の土坑1基、粘土貼り遺構1箇所、柱穴列1条、道路状遺構1条、近世の溝1条などが確認された。詳細は本文に譲るが、ここでは城郭に付随すると思われる柱穴列や粘土貼り遺構などと合わせて、今回の調査の最大の成果である土壇墓群と出土人骨を中心に簡単な総括を試みたいと考える(第11表、第4・9～27・38・39図参照)。

### 2. 今回の調査地点の占める位置

調査区の南側には、東の尾根続きより二重の空堀を渡って曲輪Ⅶへと入る旧登城道と思われる道路が通っている。調査区の表土上部の平坦面は、現状でこの道路面より2mほど高い位置にあり、柱穴列はこの平坦面と道路面のちょうど中間の斜面より、道路に沿った状態で検出された。すなわち、片野城の東側から虎口に入ると、右手の斜面に沿って櫓列が設けられていたことになる。また、調査区南東隅の粘土貼り遺構は、この虎口の北西上部の位置を占めていたと推測されることから、虎口脇の防御施設としての平場を確保・補強することを目的として、地固めのために設けられた可能性が強い。ただし、本遺構は柱穴列の廃絶・埋め立て後にその上面に構築されているため、両者は並存関係にはないが、当時の縄張り図や現地の地形から見ても、調査区一帯の四角く広がる平坦面は、元々の地形を利用しながら、曲輪Ⅶの東虎口の防御のために整備されたものと考えておきたい。そうであれば、調査区中央から東側に延びる形で検出された道路状遺構は、空堀際の防御施設へと向かう道であった可能性も否定できない。

### 3. 墓群と出土人骨

墓は全体で24基検出された。うち21基が土壇墓、3基が火葬墓である。先ず土壇墓についていえば、主軸不明の5号土壇を除く20基中、3割にあたる4・14・15・16・17・27号の6基が東西方向に主軸をとっているのに対し、残る14基はすべて南北方向に主軸をとっていた。人骨が確認された4・14号は西枕東向き、16号は東枕北向きであり、17号も同様であった可能性が高い。後者の14基のうち、人骨の遺存するものはほぼ北枕で西ないし南向きであった。埋葬姿勢は側臥屈葬ないし仰臥屈葬を主体としている。頭骨が墓壇に接する状態のものが大半であり、直葬された可能性が高い。

火葬墓は3基検出されたが、蔵骨器の使用も布で包んだような痕跡も見られず、焼骨を炭や灰と共に土壇内に直葬したような状態を示していた。また、副葬品の土師質土器(小皿)や六道銭にも被熱が見られないことから、火葬後の追納と思われる。

出土人骨中、遺存状態の比較的良好であった17体の鑑定結果が第11表である。年齢性別不明の2体を除く15体のすべてが成人であり、うち壮年女性3体に対し、壮年前半～熟年までの男性が9体を占める。中世人の平均寿命は30才ぐらいとされ、年齢的な矛盾はないが、女性の3倍という男性人骨の比率の高さは、城郭内の墓域という条件を勘案する必要のあるものと考えられる。なお、今回の人骨に関しては、戦闘による負傷の有無などを確認することはできなかった。

中世城館の発掘調査に伴って曲輪内や隣接地から墓域が検出される例は少なくない。笹生衛氏(房

総の中世墓域の発掘調査事例から、威骨器を伴う火葬墓を中心として石塔や板碑を多数伴う例をA類型、A類と同様の構成要素を持ち、大型供養塔周辺や寺院境内に設けられる例をB類型、土壌墓を中心として多数の石塔・板碑を伴う例をC類型、C類と同様に大規模な土壌墓群を中心とするが、石塔や板碑が極端に少ない例をD類型、D類と同様の構成要素を持つが、数が少ない屋敷墓的な例をE類型の5つに分類するとともに、AおよびB類を武士層、C類を在地土豪層、D類を上層農民層、E類を一般農民層の墓域にそれぞれ対応させる考えを明らかにしている（笹生1995）。以上の分類に従うならば、今回の調査で確認された墓域は笹生氏のCないしD類に相当するものと思われる。

土壌墓の配列には火葬・土葬や主軸方向、埋葬姿勢の差異などにもとづく規則性は認められなかった。ただし、規模の大きい16・17号の2墓が並列分布し、女性が埋葬されていた4・6・9号の3墓がいずれも調査区北西部に集中分布していた点は、注意を要する。さらに旧登城道に面する調査区南西部では土壌墓の分布が他と比べて疎であったことから、この付近に墓域への入り口を想定することができる。

#### 4. 墓域群の時期と被葬者の性格

墓域群の時期については、出土したかわらけの年代が16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられること、埋納された六道銭に寛永13年(1636)初鋳の古寛永が含まれず、渡来銭である永楽通宝が大半を占めること、五輪塔の宝珠や宝篋印塔の相輪部は摩滅もあって詳細は不明であるものの、土師質土器(小皿)との年代的矛盾はないこと、さらに遺構同士の重複がそれほど多くないことなどから、16世紀後半から17世紀初頭の比較的短期間に存続していた可能性を考えたい。すなわち、太田時代の末から石塚氏を経て滝川氏が廃藩となるぐらいまでの期間であり、片野城の存続時期とほぼ重なる。櫓を廃して埋め立て、墓域を拡張する一方、虎口脇の補強のためと思われる粘土貼りの平坦面や東側の二重の空堀に向かう道路状遺構が土壌墓の上に作られ、さらにこの平坦面や道路状遺構を壊す形で土壌墓が造営されていることも、墓域と城郭が並存関係にあった可能性を指し示している。なお、粘土貼りの平坦面や道路状遺構との切り合い関係をふまえるならば、道路状遺構に切られる16号土壌などは相対的に古い一群、道路状遺構を切る20・25号土壌、同じく粘土貼り平坦面を切る26・27号土壌などは相対的に新しい一群としてとらえることができる。

墓域群の性格については、男性の比率が高いこと、24基中15基から六道銭が出土し、そのほとんどが当時のこの地方では超積銭とされた永楽通宝で占められていた可能性が高いこと、石塔の使用が見られること、城内墓域であったこと、前述したように笹生氏の分類のCないしD類に相当する可能性があることなど、幾つかの特徴を指摘することができる。笹生氏はC類の被葬者について、A・BとD・E類双方の要素を持つこと、14世紀半ば以降、A・B類から独立した形で造営が開始されることなどをふまえ、南北朝を境に旧来の支配形態を脱し、急成長する土豪や国人領主層との関連を指摘している。また、C類がしばしば城郭に破壊されたり、並存する例が多いことから、被葬者層と城郭築城者との間の強い関連性についても言及しているが、本遺跡例の場合、城内墓域とはいえ、東側虎口近くという位置などを考慮するならば、その被葬者は太田～滝川時代のいわゆる番衆などの中・下級の家臣層が中心であった可能性を考えたい。永楽通宝は慶長13年(1608)に幕府によって通用禁止令が出されているため、被葬者の中味や時間的位置についてはさらに限定することも可能であろうが、同様の発掘調査例や文献史料の調査と合わせて、今後の検討課題としておきたい。

#### 5. 浄瑠璃光寺との関係

最後に、南西に隣接する浄瑠璃光寺との関係を検討したい。本調査区は、戦後、農地解放が行われ

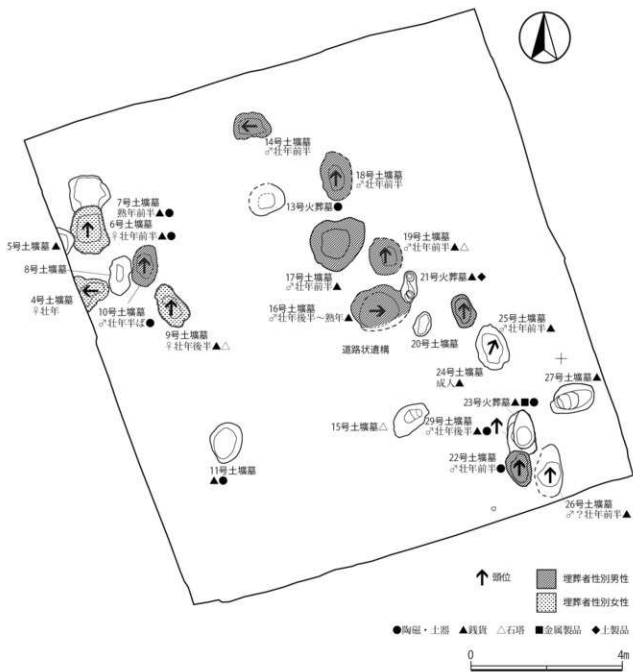
るまで同寺の敷地であった。同寺は文禄4年(1595)、石塚義辰が石塚村から移した同家の祈禱寺で、大正12年に焼失するまで廻廊付きの樓門や本堂、庫裏などを備えていたという。寺格も高く、朱印15石を拝領していた。現在は無住となっている本堂の南西に墓地があり、天正19年(1591年)に病没した太田三葉斎のもと伝えられる五輪塔が存在するが、現存する多くの墓標は江戸中期以降のものである。今回の調査で発見された墓域は、年代的には浄瑠璃光寺と重なる部分もあることから、それぞれ密接な関係を有していた可能性も否定できないが、現状では、浄瑠璃光寺移転以前からの墓域であった可能性を含めて明確な結論を導き出すことはできない。太田氏の墓が存在することや、石塚氏がここに寺院を置いた点などから、曲輪Ⅶには太田時代から一定の墓域や宗教的な施設が存在していた可能性を捨て切れないからである。なお、以前、同寺は根小屋地区でも限られた10余家の檀那しか持たなかったといわれる。今回、発見された墓域群の被葬者層との関係が注目されるところであるが、この点についても現段階では具体的な解明作業を行うことはできない。さらに片野城には鎌倉～南北朝期の城主の話も伝わるが、今回の調査では、この時期にさかのぼる遺物や遺構の分布は一切確認されなかった。

(小野・佐々木)

第8表 墓域一覧表

遺構名	平面形	断面形	規模 (cm)			出土人骨				出土遺物	備考
			長さ	幅	深さ	年齢	性別	部位	埋葬姿勢		
4号土壇墓	楕円形?	筒状ないし 竈底状	?	?	40	壮年	女性	西?	不明		
5号土壇墓	不明	皿状	?	?	27	—	—	—	—	銭貨3	
6号土壇墓	楕丸長方形	筒状	123	87	95	壮年前半	女性	北	側臥屈葬	銭貨6、小皿2	疾患歴:強直性脊椎炎
7号土壇墓	楕丸長方形	筒状	105	—	36	熟年	不明	不明	不明	銭貨6、小皿3	
8号土壇墓	楕円形	竈底状	104	51	32	—	—	—	—	なし	
9号土壇墓	不整楕円形	筒状ないし 竈底状	121	68	48	壮年後半	女性	北	側臥屈葬	五輪塔1	過剰腐
10号土壇墓	楕円形	筒状ないし 竈底状	110	65	62	壮年半ば	男性	北	不明	銭貨6	疾患歴:頸関節症
11号土壇墓	円形	竈底状	108	85	42	不明	不明	不明	不明	銭貨6、小皿1	
13号火葬墓	不整楕円形	竈底状	96	69	35	—	—	—	—	小皿2	骨片
14号土壇墓	不整楕円形	竈底状	100	62	44	壮年前半	男性	西	側臥屈葬	なし	
15号土壇墓	楕円形	竈底状	110	67	26	—	—	—	—	五輪塔2、宝篋印塔1	
16号土壇墓	円形	筒状	156	120	115	壮年後半 ～熟年	男性	東	側臥屈葬	銭貨6	
17号土壇墓	円形	筒状	162	132	82	壮年前半	男性	不明	不明	銭貨6	
18号土壇墓	楕円形	竈底状	129	63	44	壮年前半	男性	北	側臥屈葬	なし	
19号土壇墓	円形	筒状ないし 竈底状	96	76	59	壮年前半	男性	北	側臥屈葬	五輪塔2、銭貨6	
20号土壇墓	楕円形	竈底状	67	43	25	—	—	不明	不明	なし	
21号火葬墓	不整楕円形	皿状	80	40	14	不明	不明	—	—	不明土製品2、銭貨1	骨片
22号土壇墓	楕円形	竈底状	97	64	33	壮年前半	男性	北	不明	小皿1	
23号火葬墓	楕円形	竈底状	99	55	28	—	—	—	—	銭貨3、角釘8、 小皿1	骨片
24号土壇墓	楕円形	竈底状	120	78	23	成人	不明	北東	不明	銭貨6	
25号土壇墓	楕円形	竈底状	89	54	36	壮年前半	男性	北	不明	銭貨6	
26号土壇墓	楕円形	竈底状	137	75	39	壮年前半	男性?	北	不明	銭貨6	
27号土壇墓	楕円形	竈底状	120	72	43	—	—	—	—	銭貨1	
29号土壇墓	楕円形	筒状ないし 竈底状	120	74	67	壮年後半	不明	北	不明	銭貨6、小皿2	

◎人骨については、国立科学博物館・梶山真明氏に鑑定していただいた分析結果に基づく。



第 38 図 墓塚分布図 (1 : 100)

## 【引用・参考文献】

- 浅野晴樹 1991 「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心に—」  
『国立歴史民俗博物館研究報告 第31集』 国立歴史民俗博物館
- 新井白石 1977 『新編福編』 第5巻 新人物往來社
- 新井浩文 1988 「永禄十一年の關原一戦に関する一考察」『駒谷史学』39・40合併号
- 1999 『戦国政界の政治的位置』『駒谷史学』50
- 石岡市文化財調査資料編纂会 1996 石岡市の石仏 石岡市教育委員会
- 石山 功 2000 「茨城県内における永業通買渡の傾向について」『土浦市立博物館紀要 第10号』 土浦市立博物館
- 岩松和光 1998 「真壁城のかわらけ(1)「真壁家の歴代当主」 真壁町歴史民俗資料館
- 茨城県教育委員会 2001 『茨城県道跡地図』 茨城県教育委員会
- 茨城県教育財団 1986～1988 「歴史B道跡」1～Ⅲ 茨城県教育財団文化財調査報告書第33、40、45集
- 茨城県教育財団 1993 「西ノ脇道跡 前田村道跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第87
- 茨城県教育財団 2003 「堀内山道跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第199集
- 茨城県研究学会編 2006 『説話 茨城の城郭』 国書刊行会
- 牛嶋町教育委員会 1985 「堀之内大台城発掘調査報告 堀之内大台城発掘調査団・日本歴史学会
- 江戸道跡研究会編 2004 『堀と埋母と江戸時代』 吉川弘文館
- 『角川日本地名大辞典』 1983 角川日本地名大辞典 角川書店
- 編纂委員会 竹内理三編 2000 『遠坪道跡』 千葉市教育委員会・財団法人千葉市文化財調査協会
- 若津部文化財センター 1995 『神田道跡・神田古墳群』 財団法人若津部市文化財センター発掘調査報告書第101集
- 黒田基樹 2004 『堀下土杉と太田道跡』 岩田書院
- 財団法人茨城県教育財団 1997 『茨城県教育財団文化財調査報告書第122集 一般国道石岡つばね線道路改良工事地内埋藏文化財調査報告書 手田原道跡』 財団法人茨城県教育財団
- 2003 『茨城県教育財団文化財調査報告書第199集 堀内山道跡』 財団法人茨城県教育財団
- 1995 『茨城の中世かわらけについて』「研究ノート4」 財団法人茨城県教育財団
- 財団法人茨城県教育財団  
中・近世研究班  
菅生 勲 1995 「東国における中世地系の諸相」『千葉県文化財センター研究紀要 16—20周年記念論文集—』
- 瀬田平重樹 1976 「太田三楽父子の常陸入部説について」『筑東史談 第26巻』 筑東史談会
- 1978 「八郷町片野城土考」『筑東史談 第28巻』 筑東史談会
- 下中邦彦編 1982 『日本歴史地名体系 第8巻 茨城県の地名』 平凡社
- 鈴木公雄 1999 『出土瓦葺の研究』 東京大学出版会 1993
- 岡 肇編 2000 『八郷町の中世城跡』 八郷町教育委員会
- 2003 『八郷町の地名』 八郷町教育委員会
- 結野書院編定完成 1985 『新訂歴史系辞書』第8巻 結野書院編定完成会
- 1995 『片野城土器』(出雲)岡田利和とその子孫(『ちやう4』 八郷町民文化誌『ちやう』刊行委員会)
- 土屋輝雄 1994 『調査記録 花竹黄京と石塚義久(最後の石塚城主)』『茨城の文化 第17号』 茨北町郷土文化研究会
- 玉造町道跡調査会 1990 『片野城土器出土品調査報告書 村二の丸・堀内教場調査報告書』 玉造町教育委員会
- 土浦城跡調査会 2002 『発掘 土浦城跡—茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋藏文化財発掘調査報告書—』 土浦市教育委員会
- つくば市教育委員会 1989 『筑波の文化財』 工芸編
- 東海村道跡調査会・日本考古学研究所 1992 『石神城跡—茨城県那珂郡東海村所在中世城跡の調査—』 東海村教育委員会
- 中山信名 1969 『新編常陸国誌』 宮崎歴史復刊会
- 1988 『八郷町の埋藏文化財(古塚史跡整備事業への報告)』 八郷町教育委員会
- 1994 『八郷町道跡台帳No.1』 八郷町教育委員会
- 1996 『下林・中溝道跡(付五嵐古墳群)』 八郷町教育委員会
- 練馬郷土史研究会 1961～1974 『太田氏関係文書集 第1～6集』 練馬郷土史研究会
- 野村 亨 2004 『常陸小田氏の盛衰』 筑波書房
- 服部敏史 1998 「土器館からみる中世後半期の東国」『藤崎町—先生古希記念論文集』
- 堀 武男 1989 『義重家譜』『義直家譜』『先竹家譜』上 東洋書院
- 前田昌幸 1991 『考古学ライブラリー6』 歴史文化土器株式。ニュー・サイエンス社
- 藤主人名事典編纂委員会 1986・1987 『三百藩藤主人名事典』2、3巻 新人物往來社
- 福島正義 1966 『花竹義重』 新人物往來社
- 前島康彦 1975 『太田氏の研究』 名著出版
- 前田康彦 1975 『太田氏の研究』 名著出版
- 真壁町教育委員会 1996 『真壁氏と真壁城—中世武家の拠点—』 河出書房新社
- 1998 『発掘真壁城跡発掘調査報告書 筑波山麓真壁町 真壁城への誘い』 真壁町教育委員会
- 水戸市史編纂委員会 1963 『水戸市史』上巻
- 柿崎花圃 1995 「中世常陸における葬送の風景—中世墓の諸相と通史的叙述への試論—」  
『茨城県考古学誌』 第7号』 茨城県考古学協会
- 1999 「常陸地方の中世陶磁器と土器—中世びとのくらしとつたわ—」  
『常陸びものみる中世の世界—堀内出土の土器・陶磁器を中心として—』 上原洋司塚ふるさと歴史の広場
- 2003 『筑波山麓における戦国期の風景』『戦国時代の考古学』 高志書院
- 八郷町教育委員会 1995 『八郷の文化財』 八郷町教育委員会
- 1996 『八郷の歴史散歩』 八郷町教育委員会
- 2005 『八郷町史』 八郷町
- 八郷町史編纂委員会編 西原作平 1996 「中世城跡の検討、吾和原村西ノ脇道跡を例に見て。」『研究ノート』5号 茨城県教育財団



写 真 图 版





調査区全景①（西より）



調査区全景②（東より）



調査区全景③（南西より）



調査区全景④（北西より）



調査区全景⑤（北東より）



1号土坑全景（南より）



3号土坑全景（南より）



4号土坑墓遺物出土状況（東より）



6号土壙墓人骨出土状況①（西より）



6号土壙墓人骨出土状況②（西より）



7号土壙墓人骨出土状況（北より）



9号土壙墓遺物出土状況①（北より）



9号土壙墓人骨出土状況②（北より）



10号土壙墓人骨出土状況（南より）



11号土壙墓遺物出土状況①（西より）



11号土壙墓人骨出土状況②（西より）



13号火葬墓遺物出土状況（西より）



14号土壙墓人骨出土状況（北より）



15号土壙墓遺物出土状況（北より）



16号土壙墓人骨出土状況（南より）



17号土壙墓遺物出土状況（西より）



18号土壙墓人骨出土状況（東より）



19号土壙墓遺物出土状況（東より）



19号土壙墓人骨出土状況（東より）

図版 4



22号土墳墓人骨出土状況（西より）



23号火葬墓遺物出土状況（西より）



24号土墳墓人骨出土状況（西より）



25号土墳墓人骨出土状況（西より）



26号土墳墓人骨出土状況（西より）



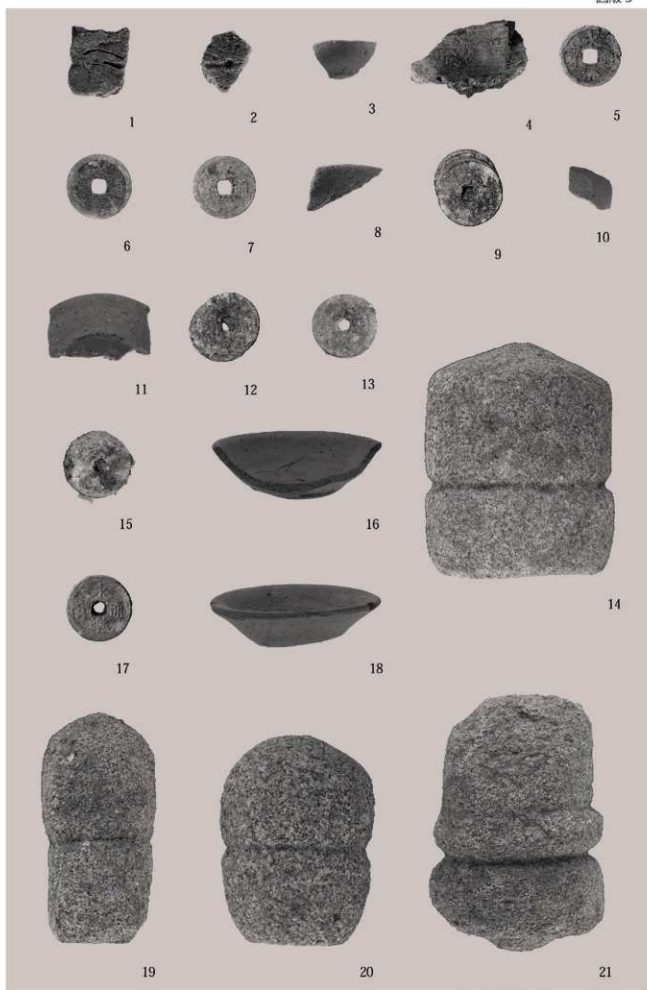
29号土墳墓人骨出土状況（西より）



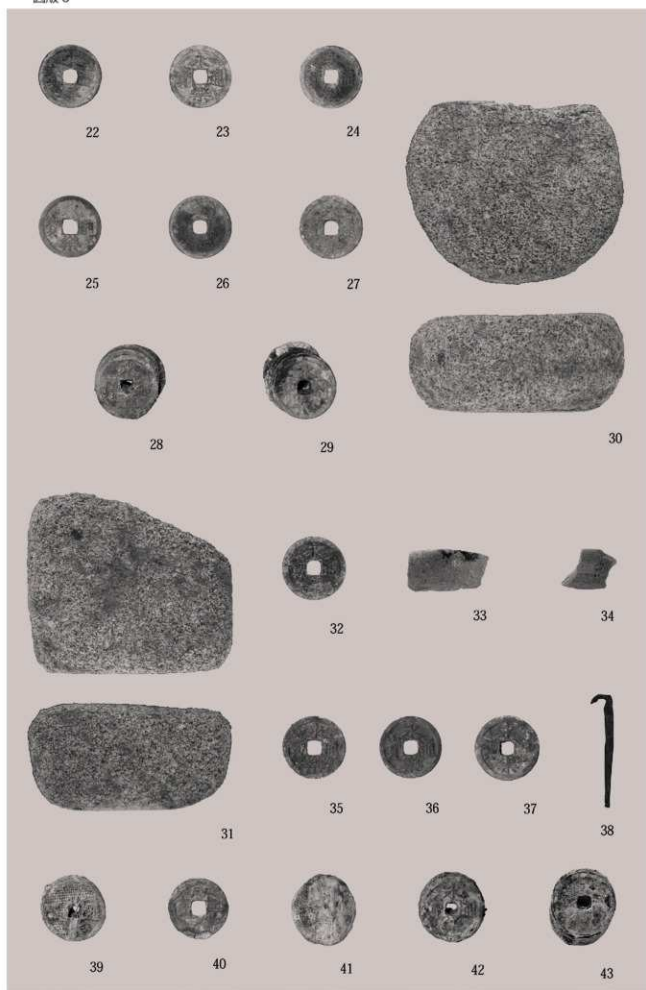
粘土貼り遺構南北ベルトセクション（西より）



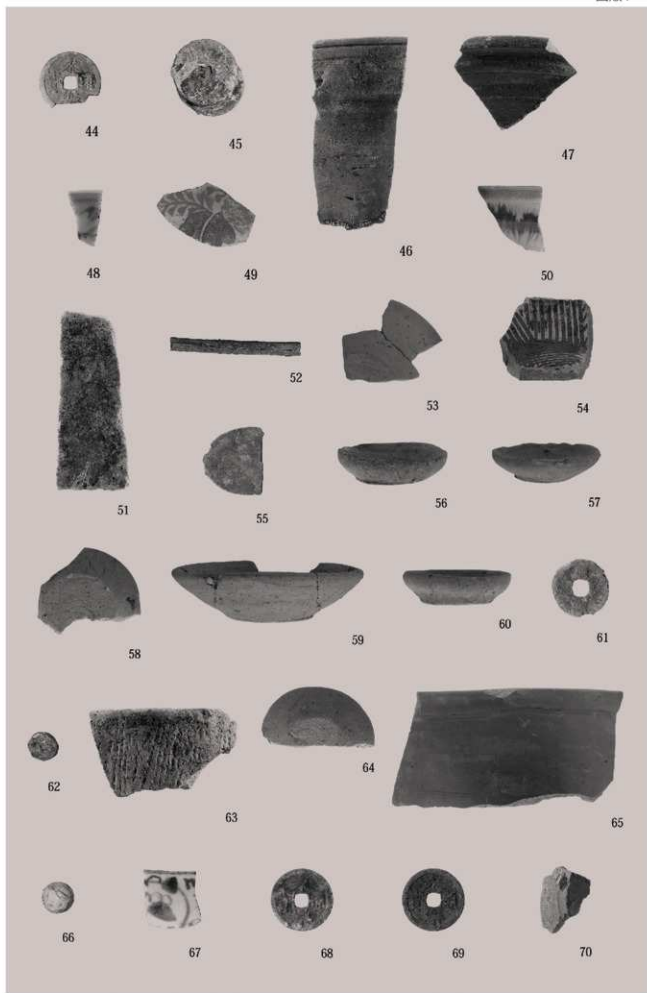
柱列穴（東より）



出土遺物 (1)







出土遺物 (3)

# 報告書抄録

ふりがな	いしおかしかのじょうあと							
書名	石岡市片野城跡							
調査名	NTTドコモ移動無線基地局建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
編集者名	佐々木修雄・小久園治・大橋 生							
著者名	佐々木修雄・小杉山大輔・小野瀬人・小久園治・林 邦雄・大橋 生							
編集機関	石岡市教育委員会							
所在地	茨城県石岡市緑岡 5680-1 TEL 0299-43-1111							
発行年月日	平成 18 年 12 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード			調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡 番号	北緯 ° ' "				東経 ° ' "
片野城跡	茨城県石岡市緑岡 石岡市榎小屋字台 401-1の一部	08205	○	36° 24' 11"	140° 12' 56"	2006.8.29 ～ 2006.9.21	156㎡	移動無線 基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
片野城跡	城跡	縄文	陥穴 2, 土坑 1		縄文早期後葉土器, 石器		片野城跡の発掘調査は 今回が初めてであり、土 壇墓と火葬墓から構成さ れる中世末～近世初頭の 居城が確認された。土壇 墓からは六道銭を伴う人 骨多数が輸出され、中世 から近世に至る過渡期の 墓制を考える上での貴重 な資料が得られた。	
		奈良～ 平安	なし		須恵器, 土師器			
		中世末～ 近世	溝 1, 道路状遺構 1, 土壇墓 21, 火葬墓 3, 土坑 2, ピット 2, 粘土貼り遺構 1, 柱穴列 3		陶磁器, 土器, 石製品 石塔部材, 銭貨, 金属製品 人骨			

茨城県石岡市

## 片野城跡

— NTTドコモ移動無線基地局建設に伴う発掘調査報告書 —

2006年12月31日発行

編集・発行 株式会社 東京航業研究所

〒350-0855 埼玉県鴻巣市伊勢沼29-1  
TEL 049-229-5771 (代)  
FAX 049-229-5775

印刷 株式会社 須崎印刷

〒315-0013 茨城県石岡市緑岡1-3-16